第12回 鹿島神宮奉納

日本古武道交流演武大会

期日 令和3年10月10日(日)
9時45分開会

会場 鹿島神宮
社殿前特設演武場

◆お問い合わせ
(公財)日本武道館 振興課
☎03・3216・5134
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2番3号

◆主催 (公財)日本武道館
日本古武道協会

◆協力 鹿島神宮

◆後援 鹿嶋市
鹿嶋市教育委員会
鹿嶋市観光協会
鹿嶋市商工会
読売新聞社

◆協賛 日本武道協議会

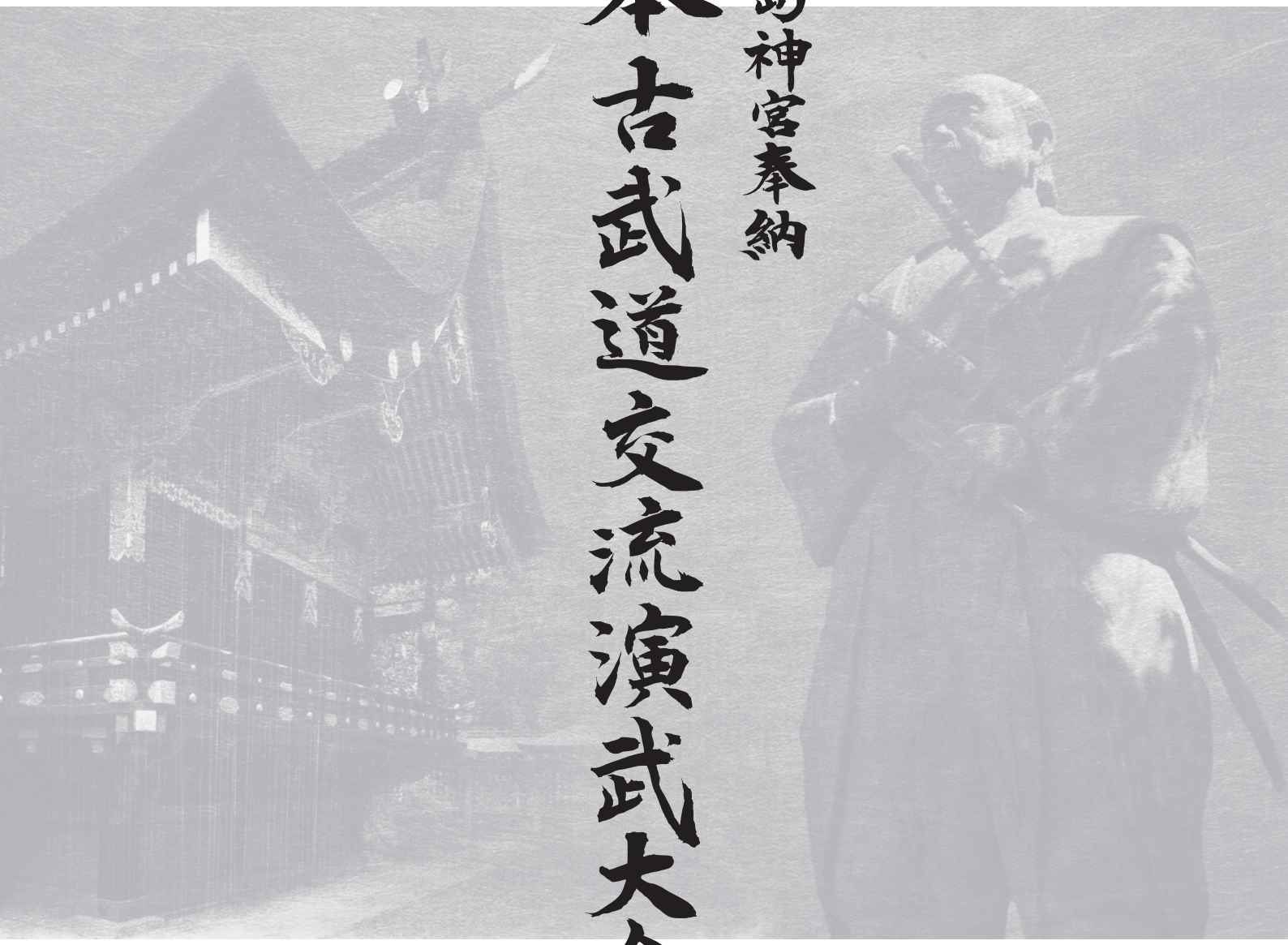
武蔵野古武道協会

公益財団法人 日本武道館

日本武道館　鹿島神宮　検索

第12回

鹿島神宮奉納 日本古武道交流演武大会



◆主　催
（公財）日本武道館
日本古武道協会

◆協　力
鹿島神宮

◆後　援
鹿嶋市
鹿嶋市教育委員会
鹿嶋市観光協会
鹿嶋市商工会
読売新聞社

◆協　賛
日本武道協議会

題字　加藤　東陽

目次

大会会長挨拶……（公財）日本武道館会長・日本古武道協会会長　高村　正彦……4
大会委員長挨拶……（公財）日本武道館理事長・日本古武道協会理事長　臼井日出男……5
祝　辞……茨城県鹿嶋市長　錦織　孝一……6
祝　辞……鹿島神宮宮司　鹿島　則良……7
大会次第……8
大会役員……10
大会運営組織図……12
日本古武道協会組織図……13
日本古武道協会 加盟流派全国分布図……14
出場流派紹介
天真正伝香取神道流剣術……18
心月無想柳流柔術……19
天然理心流剣術……20
天道流薙刀術……21
柳生新陰流兵法剣術……22
荒木流拳法……23
神道無念流剣術……24
天神真楊流柔術（新座市）……25
荒木流軍用小具足……26
金硬流唐手・沖縄古武術……27
鞍馬流剣術……28
直心影流薙刀術……29
小野派一刀流剣術……30
神道夢想流杖術……31
立身流兵法……32
戸田派武甲流薙刀術……33
大東流合気柔術……34
無比無敵流杖術……35
北辰一刀流剣術……36
天神真楊流柔術（川越市）……37
鹿島新當流剣術……38

大会会長挨拶

(公財)日本武道館会長
日本古武道協会会長
高村 正彦

本日ここに、第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会が、武神を祀る鹿島神宮において盛大に開催されるに当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

我が国伝統の古武道は、自らの身を守る護身術として誕生し、武士の生死をかけた戦いの場における闘争の術として磨かれ、平和な江戸期に入ると武士の心身鍛錬、人間修業の「文武両道」の道として、全国各藩において独自の発展を遂げ、体系化されました。その後、明治と昭和の激動期を乗り越えて、今日まで全国各流派縁の地で保存継承されてまいりました。

一千数百年の歴史を有する日本の古武道は、武技の修錬による心身の鍛錬はもちろんのこと、武士道の伝統に由来する正義、勇気、克己、礼節などの精神を養う人間形成の道として現代武道に継承されており、日本が日本らしくあるために、また武道文化発展のために古武道の普及、継承は今後ますます重要であると確信しているところであります。

現在、本協会には七十七流派が加盟し、形稽古を中心に確かな術理に立った真剣な稽古と、道を求める求道心で、国内はもとより海外においても愛好者が増えていますことは、ご同慶の至りであります。

全国から参加される二十一流派の皆様には、武神を祀る鹿島神宮の晴れ舞台において、古武道の真髄を存分に発揮されますことを心よりご期待いたします。

終わりになりましたが、本大会の開催にあたり、絶大なるご協力を賜りました鹿島神宮、並びに鹿嶋市をはじめとするご後援の諸団体、関係各位に心より感謝を申し上げ、本大会のますますの発展を祈念いたし、ご挨拶といたします。

大会委員長挨拶

(公財)日本武道館理事長
日本古武道協会理事長
臼井 日出男

本日、ここ武神を祀る鹿島神宮において、第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会が盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。

現代武道の源流である古武道は、我が国の長い歴史と伝統の中で培われ、全国各地に継承されてきた我が国の貴重な文化財であります。今日、古武道は、その技法の修錬を通じて技と心を一体的に磨き、人間力の向上を目指す道として国内のみならず海外においても高く評価されており、その輪が広がっていることは誠にご同慶の至りであります。

私は現代の日本人に欠けているものが三つあると思います。一つは「日本人としての誇り」、二つ目は「他者に対する思いやり」、三つ目は「活力、元気」であります。

これらのことは、古武道を実践、修業することによって自ずとわが身に備わってくる徳目ではないかと考える次第です。

本日、出場される皆様には、日頃研鑽の成果を存分に発揮され、古武道の「技と心」を余すことなく披露されますことを期待いたしますとともに、加盟各流派相互の交流を深められ、地域に根ざした古武道の保存振興により一層の貢献をされますよう希望いたします。

本大会も十二回を数え、年々出場を希望する流派も増え、隆盛の一途を辿るとともに、参加される皆様の熱心さも年を追って高まってきています。

これもひとえに鹿島神宮をはじめ、鹿嶋市並びに地元関係者各位のご熱意の賜物と、衷心より感謝いたし、本大会が鹿嶋の地に根づき、今後ますます発展していくことを心より祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

祝辞

茨城県鹿嶋市長
錦織　孝一

昨今、新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延により、各方面へ多大な影響が続いている状況ではございますが、今回、第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会が開催されますことに心よりお喜び申し上げます。

本大会を開催するにあたり、公益財団法人日本武道館並びに日本古武道協会をはじめとする関係者の皆様におかれましては、いつも以上にご苦労が多かったと存じ、大いにご尽力されましたことに深く敬意を表します。

当市は、武の神である武甕槌大神が祀られる鹿島神宮が鎮座し、鹿島新當流の開祖である塚原卜伝の生誕地でもあります。このように古くから武道に関わりの深いこの地において日本を代表する武道大会が開催され、各流派の皆様に参加いただけることは、当市にとって大変喜ばしいことです。参加者の皆様には、日々の研鑽をつまれてきた技を本大会でいかんなく発揮されますことを期待しています。

また、今年は「東京２０２０オリンピック大会」のサッカー競技がカシマサッカースタジアムで開催され、世界から注目を浴びる場となりました。

日本の武道においても、海外から高い関心が寄せられておりますので、古武道の伝統、技、精神力を、日本中はもとより、世界へ向けて披露してくださいますことを期待しております。

結びになりますが、本大会のご成功と関係者の皆様の益々のご活躍を祈念して祝辞といたします。

祝辞

鹿島神宮　宮司
鹿島　則良

日本武道発祥の地とされるここ鹿嶋に神代の昔より武の神と崇め奉られる「武甕槌大神」が鎮座する鹿島神宮の大前にて、第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会が盛大に開催されますことをお祝い申し上げますとともに、全国各地よりお越しいただきました各流派の皆様を心より歓迎いたします。

「令和」の御代となった一昨年に記念すべき第十回を迎えた本大会でしたが、昨年は新型コロナウイルス感染症の拡大により残念ながら中止となりました。当神宮に於いても多くの諸行事が規模の縮小、または中止となるなどかつてない対応を強いられてきました。今年に入り一部行事が感染症対策を講じながら斎行されましたが、今もなおコロナ禍は深刻な影響を及ぼしております。しかしながら、全国でワクチンの接種が始まり僅かずつではありますが日常へ復していく兆しが見えてくるのではないかと期待をしております。

各流派の皆様におかれましても対人の稽古や演武大会が開催できない状況が続き、また稽古が再開されても感染対策を講じた上での稽古となり、コロナ以前同様の修錬を積むことができないなどの御苦労をされているかと思います。このような厳しい状況の中、本大会にご参加いただきました皆様には深く謝意を表するところです。

皆様がコロナ禍の中に於いても研鑽にて積み重ねた「技と心」を十分に披露いただき鹿島の大神様の御心を安んじ奉ることが、御神威を一層高からしめて頂けることとなり、更に大神様の御神徳により、各流派が発展し古武道の更なる普及振興に御力をいただけることでしょう。

終わりに、本大会の開催に多大なご尽力いただきました公益財団法人日本武道館並びに日本古武道協会をはじめ、ご関係の皆様に心からの感謝を申し上げますとともに、本大会が益々発展していきますことを祈念し、祝辞といたします。

大会次第

◆**開会式**

一　開会宣言　日本古武道協会理事・事務局長　**内田康介**

二　国歌清聴

三　主催者挨拶　（公財）日本武道館理事・事務局長　**吉川英夫**
日本古武道協会常任理事　**錦織孝一**

四　来賓祝辞　茨城県鹿嶋市長　**鹿島則良**

五　歓迎の言葉　鹿島神宮宮司

◆**演武**

①天真正伝香取神道流剣術
②心月無想柳流柔術
③天然理心流剣術
④天道流薙刀術
⑤柳生新陰流兵法剣術
⑥荒木流拳法
⑦神道無念流剣術

⑧天神真楊流柔術（新座市）
⑨荒木流軍用小具足
⑩金硬流唐手・沖縄古武術
⑪鞍馬流剣術
⑫直心影流薙刀術
⑬小野派一刀流剣術
⑭神道夢想流杖術
⑮立身流兵法
⑯戸田派武甲流薙刀術
⑰大東流合気柔術
⑱無比無敵流杖術
⑲北辰一刀流剣術
⑳天神真楊流柔術（川越市）
㉑鹿島新當流剣術

◆閉　会

閉会宣言　（公財）日本武道館振興部長　**鈴木達也**

大会役員

＊敬称略　五十音順

大会会長

高村正彦　日本武道館会長　日本古武道協会会長　日本武道協議会会長　前衆議院議員

大会顧問

稲川泰弘　全日本剣道連盟会長　日本武道館評議員

植芝守央　合気会理事長　日本武道館理事　日本武道協議会常任理事

江渡聡徳　日本武道館常任理事　日本古武道協会常任理事　日本武道協議会常任理事　衆議院議員

川島一浩　少林寺拳法連盟会長　日本武道館理事　日本武道協議会常任理事

川端達夫　日本武道館常任理事　前衆議院議員

河村建夫　日本武道館常任理事　衆議院議員

笹川　堯　全日本空手道連盟会長　日本武道館理事　元衆議院議員

佐藤浩市　全日本なぎなた連盟会長　日本武道館理事

塩谷　立　日本武道館常任理事　日本武道協議会理事　衆議院議員

中山成彬　日本武道館常任理事　衆議院議員

番匠幸一郎　全日本銃剣道連盟会長　日本武道館理事

増田規一郎　全日本弓道連盟会長　日本武道館理事

南　和文　日本相撲連盟会長　日本武道館理事

森　英介　日本武道館常任理事　日本武道協議会常任理事　衆議院議員

山下泰裕　全日本柔道連盟会長　日本武道館理事

山谷えり子　日本武道館常任理事　参議院議員

大会委員長	臼井日出男	日本武道館理事長　日本古武道協会理事長　日本武道協議会理事長　元法務大臣
大会実行委員長	吉川英夫	日本武道館理事・事務局長　日本古武道協会常任理事　日本武道協議会常任理事
大会実行副委員長	内田康介	日本古武道協会理事・事務局長
大会委員	浅野有三	全日本弓道連盟副会長　日本武道協議会常任理事
	網代忠宏	全日本剣道連盟副会長　日本武道協議会常任理事
	飯篠快貞	日本古武道協会常任理事
	市野保己	全日本銃剣道連盟副会長　日本武道協議会常任理事
	菊池邦光	日本古武道協会常任理事
	栗原茂夫	全日本空手道連盟副会長　日本武道館評議員　日本武道協議会常任理事
	小澤　智	日本古武道協会常任理事
	竹内藤十郎	日本古武道協会常任理事
	田中英壽	日本相撲連盟副会長　日本武道協議会常任理事
	藤堂良明	筑波大学名誉教授　日本古武道協会常任理事
	長尾　進	明治大学教授　日本古武道協会常任理事　日本武道学会理事長
	中里壮也	全日本柔道連盟専務理事　日本武道館評議員　日本武道協議会常任理事
	東恩納盛男	日本古武道協会常任理事
	吉井美惠子	全日本なぎなた連盟専務理事　日本武道館評議員　日本武道協議会常任理事
	吉川常隆	日本古武道協会常任理事

大会運営組織図

大会役員

大会会長
高村　正彦
日本武道館会長　日本古武道協会会長

大会委員長
臼井日出男
日本武道館理事長　日本古武道協会理事長

大会実行委員長
吉川　英夫
日本武道館理事・事務局長　日本古武道協会常任理事

大会実行副委員長
内田　康介
日本古武道協会理事・事務局長

◆**主　催**
（公財）日本武道館
日本古武道協会

◆**協　力**
鹿島神宮

◆**協　賛**
日本武道協議会

◆**後　援**
鹿嶋市
鹿嶋市教育委員会
鹿嶋市観光協会
鹿嶋市商工会
読売新聞社

大会実行委員

味岡　功磨　大東流合気柔術
今井　淳也　鹿島新當流剣術
小國　英智　無比無敵流杖術
兼子　勝喜　北辰一刀流剣術
木村　有里　天道流薙刀術
桑波田秀祐　心月無想柳流柔術
小林　恵子　天然理心流剣術
櫻井　俊也　天真正伝香取神道流剣術
佐々木　透　金硬流唐手・沖縄古武術
柴田　俊充　天神真楊流柔術（川越市）
鈴木　宏哉　小野派一刀流剣術

鈴木　優輔　荒木流軍用小具足
寺田　裕明　柳生新陰流兵法剣術
時任　晴美　神道夢想流杖術
西川　二郎　荒木流拳法
野﨑　房江　直心影流薙刀術
萩崎　昭　神道無念流剣術
本多日向子　戸田派武甲流薙刀術
松井　康一　鞍馬流剣術
山﨑　恒弥　立身流兵法
渡邊　卓也　天神真楊流柔術（新座市）

（順不同・敬称略）

大会総務

鈴木　達也　日本武道館
中島　昭博　日本武道館
田谷　将俊　日本武道館
沢登　英徳　日本武道館
松林　裕樹　日本武道館
鶴　麻奈美　日本武道館
志村　春樹　日本武道館

大会記録

末吉　潤　日本武道館
和久田侑里　日本武道館

日本古武道協会組織図

日本古武道協会 役員名簿

会長 高村 正彦

理事長 臼井日出男

常任理事 江渡 聡徳

飯篠 快貞

菊池 邦光

小澤 智

竹内藤十郎

藤堂 良明

長尾 進

東恩納盛男

吉川 常隆

吉川 英夫

理事 飯嶌 文夫

植月 求

内田 康介

小山 秀弘

勝瀬 善光

神崎 勝

木村 恭子

小林 強

関口 芳夫

長沼 悟詮

松本 秀邦

柳生 耕一

監事 平井 正人

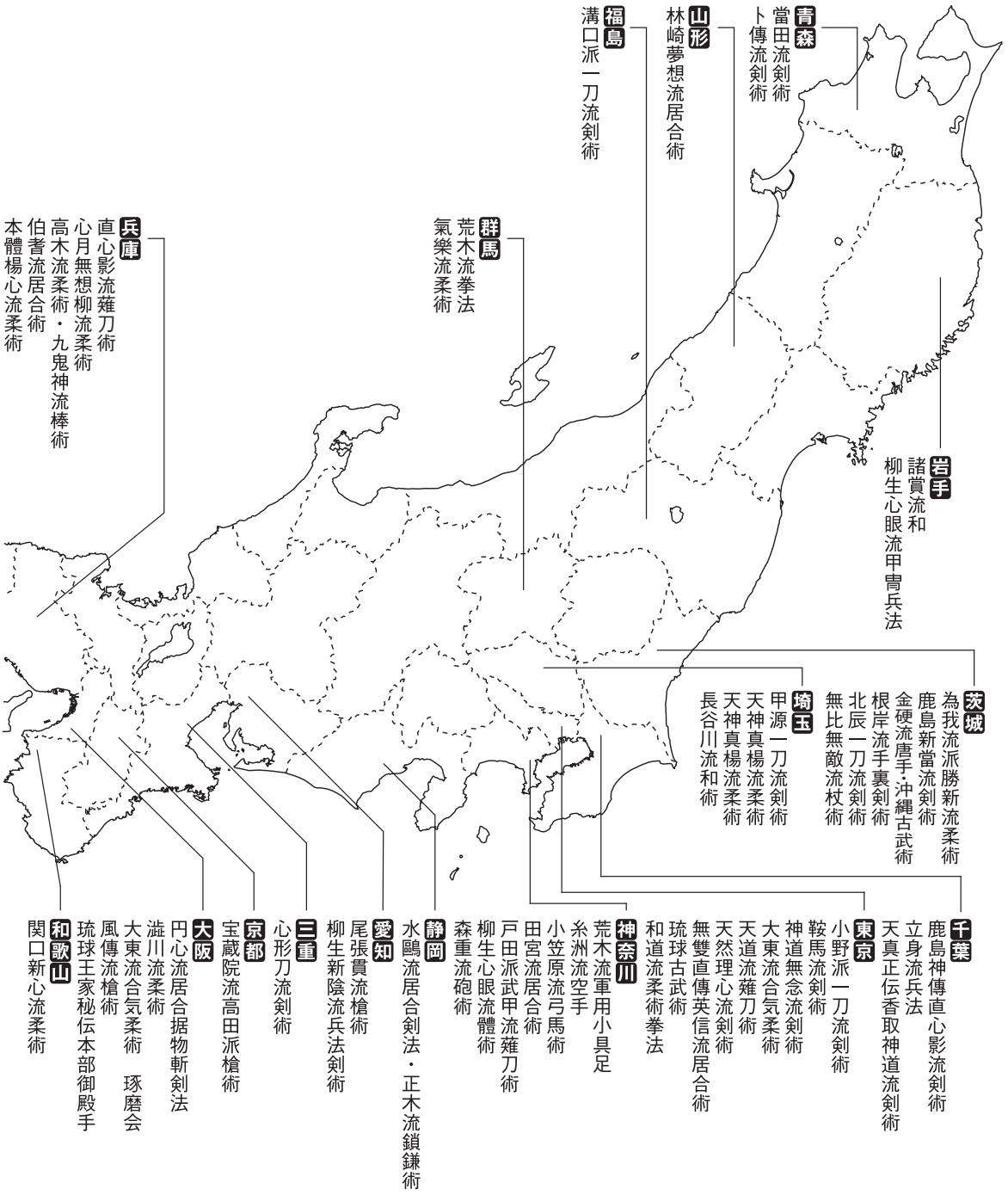
根本 憲一

日本古武道協会 加盟流派

荒木流軍用小具足
荒木流拳法
為我流派勝新流柔術
糸洲流空手
雲弘流剣術
円心流居合据物斬剣法
小笠原流弓馬術
沖縄剛柔流武術
小野派一刀流剣術
尾張貫流槍術
鹿島神傳直心影流剣術
鹿島新當流剣術
鐘捲流抜刀術
貫心流居合術
起倒流柔術
氣樂流柔術
金硬流唐手・沖縄古武術
鞍馬流剣術
甲源一刀流剣術
佐分利流槍術
直心影流薙刀術
示現流兵法剣術
澁川一流柔術
澁川流柔術
初實剣理方一流甲冑抜刀術
初實剣理方一流剣術
諸賞流和
心形刀流剣術
心月無想柳流柔術
神道夢想流杖術
神道無念流剣術
水鷗流居合剣法・正木流鎖鎌術
関口新心流柔術
関口流抜刀術
大東流合気柔術
大東流合気柔術　琢磨会
高木流柔術・九鬼神流棒術
武田流合氣之術
竹内流柔術　腰廻小具足
竹内流柔術　日下捕手開山
立身流兵法
田宮流居合術
竹生島流棒術
天真正伝香取神道流剣術
天神真楊流柔術
天神真楊流柔術
天道流薙刀術
天然理心流剣術
當田流剣術
戸田派武甲流薙刀術
二刀神影流鎖鎌術
根岸流手裏剣術
野太刀自顕流剣術
野田派二天一流剣術
長谷川流和術
林崎夢想流居合術
肥後古流長刀
兵法タイ捨流
兵法二天一流剣術
風傳流槍術
伯耆流居合術
宝蔵院流高田派槍術
北辰一刀流剣術
卜傳流剣術
本體楊心流柔術
溝口派一刀流剣術
無雙直傳英信流居合術
無比無敵流杖術
森重流砲術
柳生新陰流兵法剣術
柳生心眼流甲冑兵法
柳生心眼流體術
楊心流薙刀術
陽流砲術
琉球王家秘伝本部御殿手
琉球古武術
和道流柔術拳法

連絡先 〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園２番３号 日本古武道協会　電話 03（3216）5114

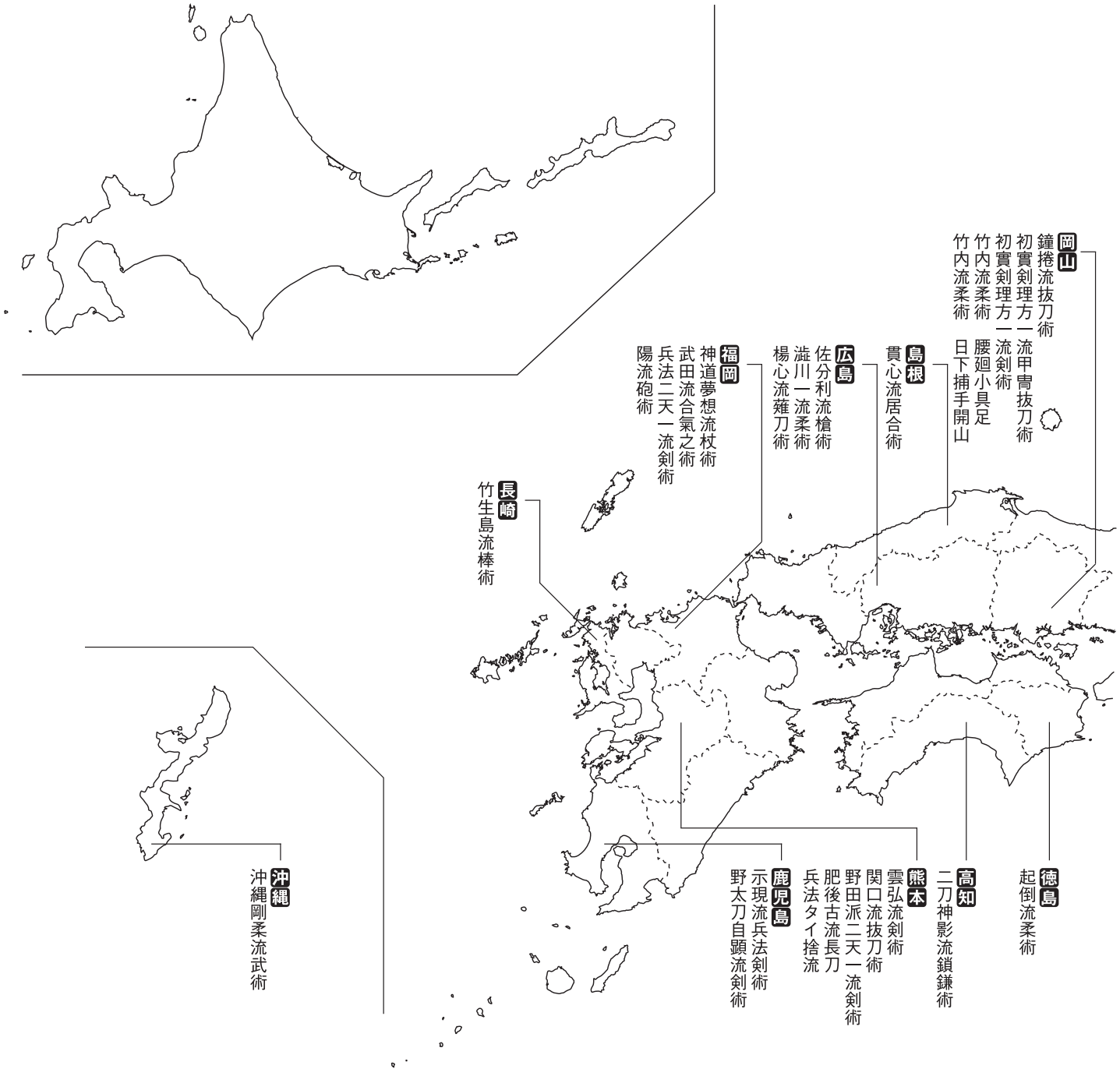
日本古武道協会 加盟流派全国分布図



古武道は、その歴史や発生の経緯がさまざまであり、流派によって種々の特色を持っている。古武道流派の発生については、平安末期や室町期という説が有力である。その源を考えると、人の歴史とともに存在した闘争術にまで遡ることになるだろう。

武の技術は原始的な闘争のなかから生まれ、それは武器の発生・進化とともに錬磨され、伝承されたと考えられる。たとえば剣の源流として知られる〝鹿島の太刀〟は、神話の時代より鹿島神宮の神官たちに伝わる刀法といわれる。中条家に伝承された中条流、竹内家に伝承された竹内流腰廻などもまた、〝イエ〟や〝寺社〟といった集団の中で発展し、伝承されてきた技術の体系といえる。

江戸期に、武家が古武道の主たる擁護者となったことは確かだが、農民や町民たちもまた古武道を愛し、その発展を支えてい



る。天真正伝香取神道流、竹内流、馬庭念流など、流儀武術の草創期に発生した流派の宗家たちが、武家への仕官を拒み、農村に居を構えて民間に武芸を指南したことは興味深い。これらの流派は、武家からも高い評価を受けて多くの門弟を得ながら、地域では農民、町民を分け隔てなく門弟に取り立て、指導してきた。古武道は武家のものであると同時に、こうした農村や市井の人々に親しまれた側面も持っており、伝承された地域独特の風俗を伝える地域文化とみることもできる。

現存する古武道諸流は、必ずしも発祥地に連綿と伝承されたわけではない。特に明治以降、古武道は修行者が激減し、伝承の危機に瀕している。そのなかで志を持つ伝承者が各地に移動し、命脈を保った流派も少なくない。

出場流派紹介

（演武順）

天真正伝香取神道流剣術

第二十代宗家
飯篠 快貞

抱負

第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会の開催を心よりお慶び申し上げます。

また、様々な困難がある中で十二回目の開催に、関係各位の並々ならぬ努力と参加させて頂く事に感謝申し上げます。

演武者一同、心を込めて香取の技と精神を奉納いたします。

由来

「天真正伝香取神道流」は飯篠長威斎家直を流祖として下総国香取の地に伝承する武術である。

家直公は香取神宮の御祭神、経津主大神の御神徳に触れ、心に悟るものがあり、香取神宮奥の院に近い梅木山に隠棲、一千日の大願をたて斎戒沐浴、百錬千鍛、粉骨の修業を重ね満願に至る時、経津主大神より神書一巻を授けられたと伝わる。家直公は経津主大神の正伝であることから、天真正伝を冠して流儀を伝えた。

以後、門外不出を旨として、一人の敵をも求めず、来るもの拒まず、去る者は追わずの主義を守り今日に至る。

系譜

飯篠長威斎家直（流祖）—盛近—盛信—盛綱—盛秀—盛繁—盛信—盛長—盛久—盛定—盛重—盛次—盛清—長照—盛照—盛重—盛房—盛貞—金次郎—快貞（現在）

流儀の特徴

戦国時代の流派であり、戦場で鎧を着用した技が多く、斬突の場所は甲冑の弱点、例えば、首、脇、小手の裏、腰の直ぐ上、内腿などを打つ。稽古中武器と武器が激しく当たっているが（実際は斬っている）、それは他から形を盗まれないためである。また、一本ごとの形が非常に長く作られている。

演武者

京増 重利
荒野 祥司
成毛 弘
櫻井 俊也

演武内容

居合術　剣術　薙刀術

活動状況

ゆかりある香取神宮での奉納演武や各地域で行われる演武大会に参加しています。

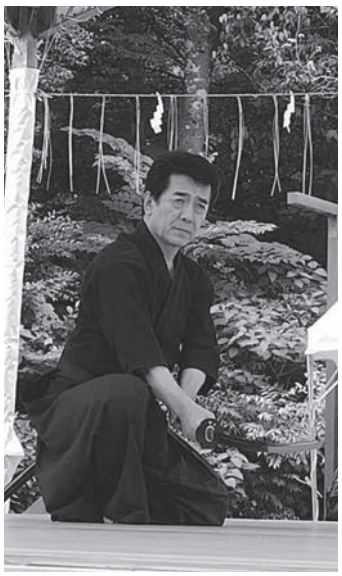
稽古日は本部道場で第四日曜日、各支部にて週二日から三日の稽古をしています。

稽古場及び支部

本部道場
〒287—0017
千葉県香取市香取1827
☎（0478）57—3161　飯篠　快貞

京増支部
☎　090—1404—7656　京増　重利

その他、国内外に支部があります。



心月無想柳流柔術

宗家十二世
岩永源三郎正義

抱負

この度は第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会にて出場の機会を頂きました事を厚く御礼申し上げます。

日本武道の発祥の地、武の神を祀るこの鹿島神宮において演武が行える事は、武道を志す者にとって非常に光栄な事であり、当流も第一回大会より連続して出場させて頂いている事を大変誇りに思います。

又一向に収束の兆しがみえないコロナ禍でありながら、この地で再び各流派が集える事に感謝し、心して演武に臨む所存です。

由来

流祖岩永源之亟正光（のち一柳斎と号す）は、肥前国伊万里の郷士で、父・仁左衛門義景に従い、柳生流剣術及び柔術を修行し、のちに鍋島藩士・古賀重太夫より楊心流柔術を学んだ。諸国武者修行の折、播州赤穂の住人・大国鬼平重信に高木流柔術及び九鬼神流棒術の免許皆伝を受け、宝暦二年五月、父・仁左衛門病死のため帰郷し、門人の育成にあたり、その人格を慕われ、隆盛を極めた。

宝暦三年三月、各流の長所を取り入れ、新流を創始、心月無想柳流と称す。その後、二代源次郎光治は、鍋島家武術師範として仕え、藩外不出の御留武術として永く後世に伝えられ現在に至り、昭和四十六年八月十一世宗家加納武彦錬岳が尼崎に道場を開く。

平成十五年七月岩永源三郎正義宗家十二世を継承す。旧道場解体のため、平成十六年九月新道場修道館を建設し、流派の保存に努める。

系譜

流祖 岩永源之亟正光―岩永源次郎光治―岩永兵部光興―岩永與左衛門正近―松尾彦四郎正次―岩永惣左衛門能正―岩永源介光義―多久島笹一則光―岩永源一光教―布谷功百畊―加納武彦錬岳―岩永源三郎正義

流儀の特徴

当流は総合武術であり、体捌きを凝らず力まず尽きず技を行うものである。これを無手で行えば柔術と称し、刀を持てば剣術となり、槍を持てば槍術である。流派の掟に則って行う体捌きは、いかなる武器をとっても武術を行うことができるのである。

演武者

桑波田秀祐　奥村宗一郎

演武内容

棒　術：向詰・付入・両小手・裏波・差合・五法
半　棒：胸打・穂詰一本・小手止・柴打・十文字・乱打
柔　術：両胸捕・首〆抜・両手止・行違・片胸捕・隼手

活動状況

稽古日時

火曜日　午後七時～九時
木曜日　午後七時～九時
日曜日　午前十時～十二時

月一回、業の研究会を開き、鍋島藩御留武術の研修を行い、流派の保存と伝承に努めている。また、春と秋の年二回定例演武会を開き、門人一同の志気向上を図っている。

稽古場及び支部

〒660―0892　兵庫県尼崎市東難波町4―17―1
☎（06）6482―0148

天然理心流剣術

十代宗家
平井正人

抱負

鹿島神宮への奉納演武の機会をいただき、厚く御礼申し上げます。

武道発祥の地である鹿島は、当流の流祖の頃より縁の深い場所でもあります。武神を祀るこの神聖な地で、日々鍛錬を重ねた技と心を持って奉納演武いたします。

本大会役員をはじめ、古武道協会の方々、各流派の先生方とともに、日本の文化・伝統である古武道の普及振興に貢献していきたいと思います。

由来

当流は、遠江出身の近藤内蔵助長裕が武術を好み、諸国を漫遊して修行。常陸に至り、鹿島新當流を学び、鹿島神宮に参籠し、術の極意を授かった。その上に創意工夫をこらし、天然理心流を創始した。その後、江戸薬研堀に道場を開き、そのかたわら、相模国や武蔵国に出稽古に赴き流儀を広めた。とくに三多摩地域に広まって、多くの先達、門人を輩出している。

系譜

近藤内蔵之助―近藤三助―近藤周助―近藤勇―近藤勇五郎―桜井金八―近藤新吉―加藤伊助―平井泰輔―平井正人

流儀の特徴

当流は、剣術、柔術、棒術に気合術を加えた統合武術。

常に真剣勝負を想定した捨て身の剣術体系で、いかなる相手に対しても動じない、極意必勝の実践を教え、自然に逆らわず、天に象どり、地に法とり、以って剣の理法を究めることから、天然理心流と命名されている。

太い木刀を使い根「魂」と力の尽きるまで切り結び、最後に止めをさす。気をもって、相手の心を奪い、すかさず技をほどこす、実戦向きで朴訥な剣法。

演武者

時田 由記
常田 貞行
小林 恵子
須田 英宏

演武内容

表木刀、柄砕、中極位目録形、小具足、居合

活動状況

古武道演武大会参加のほか、郷土ゆかりの地にて演武、交流会など多数。

稽古場及び支部

本部

天然理心流本部事務所 三鷹道場
〒181―0011 東京都三鷹市井口1―17―31
☎・FAX（0422）31―1725
毎週金曜日　午後五時～七時
日曜日　午前十時～午後一時

支部

八王子道場（読売カルチャーセンター内）
毎週土曜日　午後一時四十五分～三時四十五分

横浜道場（読売カルチャーセンター内）
毎週土曜日　午前十時十五分～十一時四十五分

天道流薙刀術

第十七代宗家
木村恭子

抱負

天道流流祖、斎藤判官伝鬼房の師である塚原卜伝誕生の地で第十二回を迎える鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会が開催されることをお祝い申し上げます。武神が祀られ神木に囲まれた神聖な地で演武させていただけることに感謝し、天道流の技と心をなお一層錬磨し、隆盛に努めてまいらねばと心新たにいたしております。

本大会の開催にご尽力賜りました関係者各位に心より感謝申し上げます。

由来

天道流の始祖は斎藤判官伝鬼房である。伝鬼は常陸国井手（茨城県）に生まれ、塚原の門に入り刀槍の術を学んだ。大勢の門弟の中で群を抜いていたが、技の未熟さを深く心に感じ、鎌倉・鶴岡八幡宮に百日参籠をなし、天正九年十一月二十一日の満願の夜、夢の中に捜し求めていた剣の妙技が記された一軸の巻物を天から授かり、誠の道にかなう妙技を得て一流を興してこれを天流と称し、後に天道流と改めた。これにより諸国を巡り修行を重ね、京都ではその剣名が上聞に達し、「一刀三礼」の秘剣を天覧に供したといわれている。諸国修行を終えて郷里井手に居を構えて名声を馳せたが、霞神道流の桜井大隅守と決闘、射殺される。その際に示した矢切りの術を「一文字の乱」といい、いまなお天道流の基本とされている。伝鬼房の最期を見届けた弟子の小松一卜斎が伝鬼房の実子、法玄にこの技を伝え、法玄は二代目を継承し、その流儀は現在まで薙刀、二刀、杖、剣、鎖鎌、小太刀などの技が伝承されている。

系譜

斎藤判官伝鬼房（初代始祖）
- 斎藤牛之助（三代）―日夏喜左衛門重能
- 実子 法玄（二代）―人見熊之助（三代）―斎藤右兵衛（四代）―加古利兵衛正真（五代）―村上権左衛門（六代）―日夏弥助能忠（七代）
  - 下河原新内恭長（八代）―下河原新内一恭（九代）―下河原新内一致（十代）―日夏弥助繁高（注）
  - 下河原辨蔵市行（十一代）―下河原唯六一弘（十二代）―下河原洗一致霍（十三代）―美田村顕教（十四代）―美田村千代（十五代）―美田村武子（十六代）―木村恭子（十七代）

（注）本朝武芸小伝十巻・本朝武林原始八巻・兵家茶話十巻・兵家物語三巻の著者である。

流儀の特徴

天道流は形試合、すなわち形そのものが真剣試合と同じとされている。相手の動きに従い、千変万化、無理なく合理的に薙刀の筋条を正しく押し切り、引き切り、あるいはエグリ突く。腰の開き、組足の力に特徴がある。

天道流兵法序歌

「極意とて　別にきわまる　事もなし
　たえぬ心の　たしなみを云ふ」
「兵法は　目つけ手のうち　心持ち
　懸待の間を　常に忘るな」

演武者

木村恭子　細井優子
木村有里　清水真由美

演武内容

薙刀　受太刀　木村　有里　仕太刀　清水真由美
二刀　受太刀　木村　恭子　仕太刀　細井　優子
薙刀　受太刀　木村　恭子　仕太刀　木村　有里

活動状況

眞月会という会を起こし、各地で指導にあたり会員を作り、研修会を開いて一堂に集まり、後世に正しく伝承されている業と心を伝えるため研鑽に励んでいる。また、年に一度大会を開き、成果を発表している。

年間事業

天道流春季・秋季研修会　天道流演武大会
眞月会月例稽古会（毎月第二日曜日）　地方研修会

稽古場

公益財団法人修武館
〒664―0858　兵庫県伊丹市西台3―2―11
☎（072）773―1431
連絡先　第十七代宗家　木村　恭子
〒167―0052　東京都杉並区南荻窪1―36―3
☎（03）3334―9111

柳生新陰流兵法剣術

第二十二世宗家
柳生耕一厳信

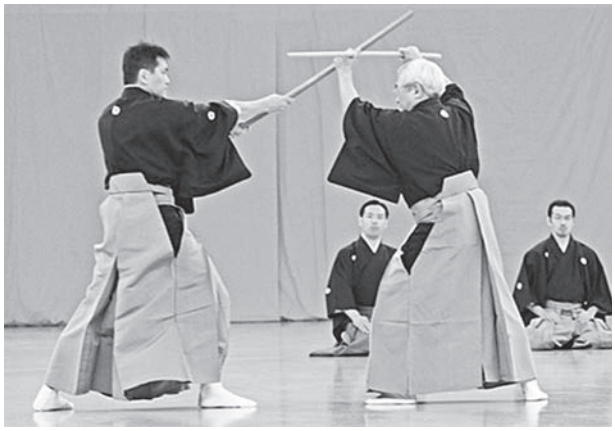
抱負

武術は命をかけた戦いの中から発生し、やがて江戸時代を通じて修身の道へと昇華された武道となり、この国の長い歴史の中で育まれた文化の結晶となりました。

我々は、心身一如で行う古武道の稽古鍛錬を通して、日本の伝統文化の精神を学び、古人の英知を現代社会に活かしていく責務があります。

本大会の参加が、日々の修行への一層の精進に資するものと期待しています。

由来



室町末期、上泉伊勢守信綱は愛洲陰流より「転」を工夫して新陰流を創始した。信綱に師事した柳生石舟斎宗厳は無刀の位を開悟して第二世を継いだ。宗厳の長男厳勝の子、兵庫助利厳は祖父石舟斎の薫陶を受け、異才が開花し第三世を継承した。元和元年に初代尾張藩主徳川義直公の兵法師範となり、太平の時代に即応する直立たる身（自然体）の兵法を確立し、上泉流祖以来の剣の理と刀法に根本的な改革を加え、当流を大成した。利厳の子、連也厳包も天才的な達人で尾張の麒麟児と尊ばれ、道統は尾張柳生家当主と尾張藩主徳川家の協力によって正しく伝承され、第二十二世宗家柳生耕一厳信に至っている。

系譜

上泉信綱―柳生宗厳―柳生利厳―徳川義直―柳生厳包―徳川光友―徳川綱誠―柳生厳延―徳川吉通―柳生厳儔―柳生厳春―徳川治之―柳生厳之―柳生厳久―徳川斉朝―柳生厳政―柳生厳蕃―徳川慶恕―柳生厳周―柳生厳長―柳生厳道―柳生厳信

流儀の特徴

心身ともに「無形の位」を本体とし、千変万化する相手を明らかに観て、その働きに従って無理なく転変して勝つ自在の刀法、すなわち活人剣である。太刀を全身の働きによりのびのびと遣い、刀身一如、臨機応変、自由活発に働く神妙剣を目指している。流祖以来の剣の理と刀法が正しく体系的に完備している。

演武者

寺田　裕昭　渕上　俊顕　竹内　孝幸
柳生耕一厳信

演武内容

三学円之太刀　上泉信綱創案の当流の代表的な太刀の一つである。「一刀両段」「斬釘截鉄」「半開半向」「右旋左転」「長短一味」の五本から成り、「待」の剣理を具現したものである。

試合勢法　尾張柳生独特の刀法で、徳川中期に作られ、基本から実践まで多種多様にして百数十本ある。流祖伝来の太刀が正しく使えるように、体の働きをこの勢法で稽古する。

燕飛之太刀　上泉信綱が愛洲陰流の「猿廻」より発展させた「燕飛」「猿廻」「山陰」「月影」「浦波」「浮舟」の六本として完成した。これを序、破、急の調子により連続して遣う。懸、待、表、裏の刀法が円転滑脱、流れる如く自在に展開する。

活動状況

左記の定例稽古の他、年一回、全体合宿・外国人セミナーを行う。口伝書などの解説を行う講道を含み、宗家直伝の稽古形態をとる。

稽古場及び支部

名古屋柳生会
・名古屋市天白スポーツセンター他
毎週火曜日・木曜日　午後七時～九時
・名古屋市露橋スポーツセンター他
週末月二回　午後三時～六時

東京柳生会
中野体育館他　火曜日　午後六時半～九時
中野勤労福祉会館他　日曜日　午後二時～五時

関西柳生会
豊中市武道館「ひびき」土曜日　午後一時～四時

安城柳生会
正武館道場　水曜日　午後八時～十時

柳生会米国
剣禅道場（ニューヨーク）土曜日　午後一時～四時

香港柳生会
鴨州州体育館　月曜日・金曜日　午後八時～十時

柳生会
柳生新陰流兵法剣術 オフィシャルサイト
http://yagyu-shinkage-ryu.jp/

荒木流拳法

第十七代宗家
菊池 邦光

抱負

今も尚、新型コロナウイルス感染の影響は続いております。こうした状況の中で、武神を祀る鹿島神宮に於いて、第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会が実施されることは、誠に意義深いことであります。荒木流拳法もお陰をもちまして、これまで連続して参加させて頂いております。本年は特に諸般の事情等により、練習量も少ない中での参加でありますので、本番では、これまでに培った技を存分に発揮して奉納させて頂きます。

また、本大会にご尽力を賜りました関係各位に対し、心から感謝と敬意を申し上げます。

由来

今より四百余年前、天正の昔より言い伝えがある。『武芸流派大辞典』『尾張藩武術集録』及びその他の文献などによれば、荒木流拳法は、荒木村重の孫にあたる荒木夢仁斎源秀縄より伝承された。古くは中国拳法から発達し、戦国時代の天正年間、荒木夢仁斎のころ、実戦体験から武術として伝えられたものである。

この武術は現在から見れば原始的要素を多分に持っている。言いかえれば武術が剣術、柔術などに体系付けられる以前のもので、棒、鎖、小具足、長巻、刀術、拳法などが未分化のまま受け継がれている総合武術である。

系譜

荒木夢仁斎秀縄―森霞之助勝重―山本嘉助勝久―竹内九郎右ヱ衛門勝吉―高橋儀右ヱ衛門森久―方坂九郎右ヱ門吉久―向井左次郎正久―小林藤左ヱ門常正―小峰文太武矩―栗原五百二正重―鈴木円太夫義直―大和兵内規重―新井富蔵忠好拳斎―菊池毅之進知方―大和彌藤次知和―菊池源吉和吉―菊池邦光

流儀の特徴

一、綜合的な武芸の流儀である。
二、鎖鎌、乳切木などにおいて鎖を使用する。
三、攻めが主体でなく、防御を基本とする。
四、各技も荒々しく実戦的、技の最後は必ずとどめを刺す。
五、棒、鎖、小具足、長巻、刀術、拳法などが未分化のまま、受け継がれている総合武術である。
六、荒木流拳法の理歌の一つに「稽古をば勝負するぞと思えないし勝負は常の稽古なるべし」としている。

演武者

菊池 邦光
西川 二郎
細野 桂一
鈴木 崇史

演武内容

棒術
一、入身　二、腹掃き　三、冠落し
四、二ツ掃き　五、返し棒

乳切木
一、一つ打ち　二、飛び違い　三、足巻
四、太刀巻　五、首巻

鎖鎌

居捕り 二本
一、玉あて　二、入身

立取り 三本
一、太刀取り　二、鎌にてあて身　三、首巻

特徴 乳切木、鎖鎌の両技は、いずれも一メートル二十センチの鎖を使用しての技であり、共に実戦的な技である。

活動状況

現在の稽古は、毎月第一・第三土曜日（昼間）自宅で、門下生の指導にあたっている。

また、年間事業などについては、各地方で開催される、各種の古武道演武大会に参加し、古武道の普及発展に努めている。

さらに海外への文化交流に対しては、日本武道団代表の一員として、これまでにフランス・モナコ・ニュージーランド・ポートランド・ミネアポリス・ボストン・スペイン・カナダ・ブラジル・ロシアに渡り、国際文化交流を図っている。

稽古場及び支部

道場所在地
〒372―0033 群馬県伊勢崎市南千木町2235―1
☎（0270）26―1560

神道無念流剣術

有信館長
小川 武

抱負

鹿島の太刀で知られ、松本備前守、塚原卜伝誕生の地である鹿島神宮社殿特設演武場で行われる、第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会に参加できますことは大変に光栄なことであり、より一層の精進に励んで大会に臨み、神宮に棲む剣の神々の匂いに少しでも触れられたらと思います。

由来

流祖・福井兵右衛門嘉平は元禄十三年、下野国に生まれ、一円流の野中権内について修業した。諸国武者修業に励み、信州戸隠の飯綱権現に立ち寄って参篭、祈願すること五十日に及び、ついに剣の奥義を悟り、神道無念流を創始した。その後、江戸四谷に道場を開き、門弟の育成と流派の発展に努力した。神道無念流が広く世間に知られるようになったのは戸賀崎熊太郎暉芳からである。暉芳は延享元年武州清久村の生まれで、十五歳のときに江戸に出て嘉平に師事し、弱冠二十一歳で免許を得た。岡田十松や斉藤弥九郎などの剣客がこの門から出るに及んで一層隆盛を極め、特に斉藤弥九郎は、北辰一刀流の千葉周作、鏡心明智流の桃井春蔵と並び幕末三剣豪といわれた。門下には江川太郎左衛門、藤田東湖、桂小五郎、品川弥二郎、秋山要助、仏生寺弥助ら錚々たる剣客や人物を輩出した。明治以降、根岸信五郎、中山博道、中山善道によって受け継がれた。

系譜

流祖 福井兵右衛門嘉平―二代 戸賀崎熊太郎暉芳―三代 岡田十松吉利―四代 斉藤弥九郎善道―五代 斉藤新太郎龍善―六代 根岸信五郎―七代 中山博道―八代 中山善道―九代 佐伯宗一郎―十代現館長 小川武

流儀の特徴

当流は幕末の動乱期に文武を奨励し、精神の鍛錬を最も重視した義に用いる剣であり、その根本的な思想は和である。昔は「鞘の中に抜かざる刀」を絶えず念頭におき、みだりに事を刀で表すことを禁じられていた。その極意は表面にまだ現れない現象をいち早く捉えながら、何事にも影響されない柔軟な対応、円にして縁を切らない剣法、その無念の境地を学ぶことにある。

演武者

有信館長　小川 武　免許
順免許　土屋 正則　目録　玉根 純也

演武内容

中伝組太刀　一本目　五本目　六本目　七本目

こめかみ、右足への攻撃をかわし、刀身に左手を添え頭上に斬りつける。相打ちから脇構に引き、正面を切り来るを払い落として正面を斬る。下段から中段になるのを左右にいなされ、正面斬りを摺り上げ摺り落として下から左腕に斬りつける。左右に捌いて頭上への攻撃、最後は逆胴斬りなど。

非打　二本目　七本目　八本目　九本目

足に斬り来るを上体を下げて受け、上体を伸ばして頭上から巻き上げ、前に崩すなどがある。

立居合

霞からの斬り上げに特徴あり。

活動状況

毎週（日・木・土）三日稽古会を開き、中山博道伝承形（剣術・居合術・杖術）の研修に邁進し、大久保・中目黒・松戸・埼玉支部の巡回指導。日本古武道協会及び日本古武道振興会の各種大会に出演して、門弟の育成と流派の発展に努めている。

稽古場及び支部

大久保（毎週木曜日午後七時～九時）新宿ＢＭＴスタジオ
中目黒（毎週日曜日午前八時～十時）
中目黒ブロードウェイスタジオ
埼玉支部（支部長　萩崎昭）
さいたま市大宮武道館及び大宮市民体育館
日曜日　午後五時～七時（不定期）
月曜日　午後五時～七時（不定期）
土曜日　午後三時～五時（不定期）
松戸支部（支部長　土屋正則）
稔台市民センター
土曜日・日曜日（不定期）
中国・広州支部

ホームページ　http://www.shinto-munenryu.jp/
連絡先　城﨑建太郎　☎（０３）５２７５―３３５３
〒102―0073　東京都千代田区九段北１―２―３
フナトビル七階　東京神田法律事務所内

天神真楊流柔術（新座市）

師範家　久保田修弘

抱負

この度は鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会の開催にあたりご尽力下さりました関係者各位に心から感謝申し上げます。お陰様で先代、酒本房太郎より伝わる当流の教えも無事に令和の時代にまで伝える事が出来ました。

本日は由緒正しき鹿島の地にて、育ってきた弟子と共に奉納演武出来る事はこの上ない喜びであります。これからも伝承が途絶える事が無いよう、更なる精進に励みたいと存じます。

（顧問　坂本　忠彦）

由来

流祖は紀州藩士、磯又右衛門柳関斎源正足（文久三年・一八六三年没）伊勢松坂生まれ。楊心流、真之神道流を修行し、奥義を極める。京都北野天満宮に参籠し楊柳の風になびく様を観て大悟し「北野の天神様」と、これまでに修行してきた二流「真」と「楊」の文字を合わせ天神真楊流と名付けた。江戸神田お玉ケ池に道場を開き、諸国の門人は五千余りを数えた。講道館柔道の創始者　嘉納治五郎師範は明治十年に師範家、福田八之助の門に入り修行を始める。明治十二年師の死去にあい、三世磯又右衛門源正智について修行を続け、その理合いや技を応用し明治十五年講道館柔道を創始した。

系譜

元祖 磯又右衛門源正足
二世 磯又一郎正光
三世 磯又右衛門正智
四世 磯又右衛門正信
五世 磯又右衛門正幸
絶家

- 井上敬太郎
- 吉田　千春
- 福田八之助（幕府講武所　師範）
  - 嘉納治五郎（講道館柔道　創始者）
    - 吉沢　清（講道館　八段）
    - 油谷　忠（講道館　六段）
    - 久保田敏弘（講道館　七段）
      - 久保田修弘（師範家）
    - 坂本　忠彦（講道館　七段）
- 八木寅次郎（大日本武徳会　範士）
  - 酒本房太郎（講道館　九段）
- 戸沢徳三郎（大日本武徳会　範士）
  - 植芝　盛平（合気道　創始者）

流儀の特徴

柔軟な身体をもって相手の気力に逆らわず、変化に応じ相手を崩し制する。投技、関節技、絞技の多くが講道館柔道の基盤となっている。また実戦における真の当（急所への攻撃）を技法の中で活用している。

演武者

坂本　忠彦　　渡邊　卓也　　古川　眞一

演武内容

初段居捕

①真之位　後方へ倒した後に締め技にて制する。

②添捕　横向きに投げながら同時に首を締め制する。

③後捕　後方より押さえつけを解いた直後に前方へ投げる。

中段居捕

④左胸捕　腕を逆に極め、うつ伏せにて制する。

⑤右胸捕　当身を入れた後に後方へ倒し制する。

⑥袖車　襟を取り後方へ回り込んで首を絞める。

⑦左右之曲　後方に反らし、体の支えを離し地面へ落とす。

投捨

⑧鐘木　当身を受けた後に、足を刈り仰向けに投げる。

⑨朽木倒　左手にて足を刈りながら右手にて後方に押し倒す。

⑩腕絡　当身を受けた後に、腕をからめて関節を極める。

極意上段立合

⑪杉倒　前方にうつ伏せに倒した後に、足関節で制する。

⑫天狗勝　前方に引き崩した直後に首を制し、急所へ当身を入れる。

活動状況

日本古武道協会主催の演武会をはじめ、各地の奉納行事に参加している。またジャカルタで開催された日本・インドネシア国交樹立60周年記念事業では日本武道代表団の一員として演武を行った。

稽古場及び支部

文京スポーツセンター
東京都文京区大塚3丁目29—2

千代田区スポーツセンター
東京都千代田区内神田2丁目1—8

新宿スポーツセンター
東京都新宿区大久保3丁目5—1

中央区立総合スポーツセンター
東京都中央区日本橋浜町2丁目59—1

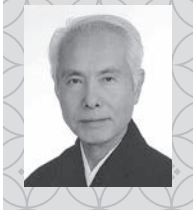
東松山武道場
埼玉県東松山市本町1丁目2—21

四国支部
〒799—0413　愛媛県四国中央市中曽根町796—3　八木接骨院内

連絡先　本部事務局
〒355—0047　埼玉県東松山市高坂849—6　渡邊卓也　方
☎0493—81—7964　☎090—3420—2056
info@takuya.in

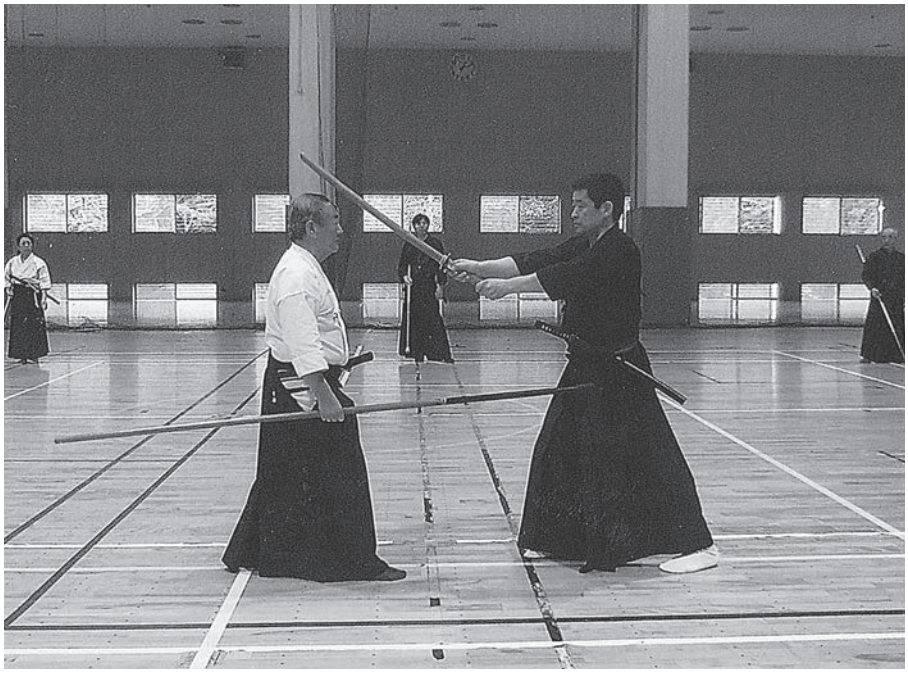
荒木流軍用小具足

代表師範　千葉　明



抱負

第十二回鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会が開催されますこと心よりお慶び申し上げます。古来より由緒正しき武甕槌大神様の御神前で奉納させていただけること大きな喜びであり身の引き締まる思いです。日々稽古に励んでまいりました伝統の技を心をこめ誠心誠意演武させていただきます。



由来

当流は初代荒木夢仁斎源秀縄がこれをはじめ、第四代赤羽一間多源信隣が、文化五年に荒木流軍用小具足、すなわち、棒、居合、長刀、捕手、柔、縄、太刀、槍、乳切木などの各種武術を取り入れ、総合武術として完成したものである。八代宗家松尾剣風は明治三十六年福岡県鞍手郡に出生、五歳にして祖父黒田藩剣術指南役より武道の手ほどきを受け、以来武道一筋に修業を重ね、その妙技を極めた。昭和六十年六月、松尾剣風師範亡きあと、門人一同結束を固め、古武道保存と振興のため、流儀を継承すべく、研鑽、精進を重ね、今日に及んでいる。

系譜

荒木夢仁斎源秀縄（流祖）―荒木武左衛門（二代）―塩野奉行（三代）―赤羽一間多源信隣（四代）―小松廣三郎（五代）―松尾作左衛門安信（六代）―勝野秋雄（七代）―松尾剣風（八代）―保科侃司（九代）―千葉明（代表師範）

流儀の特徴

当流はすべて実戦体験から武術として伝えられたものであり、極めて即実践的な特徴をもっている。なかでも居合は二刀を帯びて行ない、小具足・体術の要素が入れられ、立居合のほとんどが袈裟斬りで敵を倒す。

演武者

千葉　明　坂本　浩一
鶴岡　嘉治　鈴木　優輔

演武内容

槍術
脇払　左脇構　袈裟斬　突落

居合術
向動剣　柄留　横剣　剣龍　居抜

活動状況

日本古武道協会・日本古武道振興会が主催する日本古武道演武大会をはじめ下鴨神社、白峯神宮、鹿島神宮、明治神宮での奉納演武に参加、また地元古武道大会および毎年秋季には総合武道演武大会を開催し伝統武術の向上と普及に努めている。

稽古場及び支部

稽古日　毎週日曜日　午前・午後
連絡先　090―1948―2010（千葉　明）

稽古場
神奈川県立武道館（横浜市港北区岸根町725）
横浜武道館（横浜市中区翁町2―9―10）
たきがしら会館（横浜市磯子区滝頭3―1―68）
初音ヶ丘地区センター（横浜市保土ヶ谷区藤塚町15―1）

金硬流唐手・沖縄古武術

代表幹事
早坂ゆかり

抱負

コロナ禍、鹿島の地で大会に参加できることを光栄に思います。先代宗家生誕一〇〇年の記念すべき時、琉球王国の侍が鍛錬した「武術」を公開し、日本の武術との共通性を見ていただき、先師の御霊に御報告したいと願っております。鹿島の演武大会を当流派の行事として継続し、今後も活動していきます。

由来

当流派は、琉球王朝時代に中国清王朝との交易から文化交流が生まれ、大和の武術と少林武術の影響を受け、琉球の「武術」が発展したものであります。

又吉家は、代々「麻氏」を門中として、琉球王朝時代を生きて来ました。その門中の中には、多くの武士がおり、明治政府が沖縄県として日本に併合した際、反対士族は、頑固党として、新天地を開拓し、嘉手納の千原にヤードイを建築しました。ここに集まった士族の中に多くの武人がおり、又吉眞得が中心になり、琉球王朝時代からの武術の保存が始まったものです。

系譜

太宗眞武―以下十二代略―眞得（天明六年生）―眞珍（引化元年生）―眞光（明治二十一年生）―眞豊―眞靖

流儀の特徴

禁武政策を取られた琉球王国は、自衛の手段として少林武術と大和の武術を琉球化して発展、完成されました。その武術を廃藩後、保存しました。継承された武術は、「首里系武術、南少林派鶴拳、福州系武術、上海系武術、琉球中山系武術、琉球那覇系武術、琉球泊系武術であり、総称して「手」及び「唐手」と言われたものを継承しております。

演武者

一	周氏之棍	演武者
二	二丁釵	演武者　助手
三	虎之手	演武者　教士
四	流星鎌	演武者　範士

佐々木　透
早坂ゆかり
大和久正幸
早坂　義文

演武内容

唐手と沖縄古来の「武術」を保存する当流は武器を持たない国として米国ペルー総統を驚かした。守礼の国「沖縄」は自らの自衛の手段にしか武術を使用しませんでした。

今回は、琉球武士麻氏門中が継承した天眞正傳の影響を受け発展した「武術」と大陸の武術の影響を受けた武術を演武いたします。

活動状況

日本古武道演武大会（古武道協会）、全国武徳祭、夏季古武道セミナー、沖縄県県民体育大会、鹿島神宮交流演武大会、その他海外に普及活動を実施しております。

○**稽古日**　各道場により異なります。

稽古場及び支部

○**本部道場　光道館総本部**
〒900―0023　沖縄県那覇市礎辺1―11―15
☎（098）834―7866

○**支部道場　龍ケ崎光道館**
茨城県龍ケ崎市川原代町4073―2
☎（0297）85―3477
その他眞豊先生が普及した道場は国内国外に多数あり、現在宗家が統一を図っています。

鞍馬流剣術

第十八代宗家
柴田 章雄

抱負

第一回大会より参加させて頂き光栄に存じます。武の神である武甕槌神を祀る鹿島神宮という由緒正しき場所で鞍馬流の演武をさせていただくことは、このうえない喜びであります。日頃の修練の成果を存分に発揮できる場を得たことを感謝し全力で演武させて頂きます。本大会の開催にご尽力賜りました関係各位に心より感謝申し上げます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

由来

京都の鞍馬山には、源義経が、鬼一法眼に就いて修行し、超人的な腕前に達した、との言い伝えがある。鬼一法眼は義経の他、鞍馬の八人の僧兵へ武術を伝えており、これが鞍馬八流、または京八流と呼ばれているが、確かなことはわかっていない。流祖の大野将監（天正年間の人）が何人について修業し、この刀法を編み出したかは戦災により秘伝書焼失のため不明である。鞍馬と名のつく流派は剣・槍・棒・抜刀などいくつかあったが、剣術では将監鞍馬流だけとなってしまった。

将監鞍馬流は、天正年間に大野将監によって創始され、林崎甚助、加藤玄蕃、幕末から明治にかけて、十四代金子助三郎、十五代宗家を継いだ柴田衛守が流派の中興の祖といわれている。柴田衛守は直参旗本出身で、東京四谷に習成館道場（勝海舟命名、一八七九年創設）を開いて門人を育てる。大日本武徳会剣道範士、警視庁剣道主席師範をつとめる。衛守の子勧（警視庁、貴衆両院剣道師範）と受け継がれたが、昭和二十年の戦災で習成館道場は焼失し、鞍馬流の秘伝書、古文書、武具など全て灰となってしまったのは誠に惜しい極みである。その後勧の子十七代鐵雄により道場は再興され、現在は鐵雄の子章雄が十八代宗家として鞍馬流と、東京にある個人の剣道場では一番古い剣道場習成館を継承している。

系譜

大野将監（流祖）…林崎甚助…加藤玄蕃…金子助三郎—柴田衛守—柴田勧—柴田鐵雄—柴田章雄

演武者

宗家　柴田 章雄　吉田 穣覚
松井 康一　渡辺 良雄

演武内容

鞍馬流の木刀の形は、蛤刃の太い木太刀を使って行い、気迫に富んだ発声をもって演武するのが特徴である。形は七本ありその名称は、正當剣、閃電、燕飛、青眼、変化、気相、水車である。五本目の変化は、「警視流木太刀の形」の二本目に採用されている捲き落とし技で、現代剣道においても大いに活用されている。

鞍馬流居合は五本あり、その名称は一文字、胸之位、戻り打、上段、地摺である。

本日は、木刀七本、居合五本から演武させていただきます。

活動状況

現在の活動状況は、毎週月、火、水、金曜日と第二・四土曜日の夕刻より習成館道場で現代剣道と併せて鞍馬流の稽古を行っている。木刀の素振り、形稽古だけでは手の内ができない、と考え防具を着用した竹刀剣道と居合も行いながら、技量・人物に応じながら、鞍馬流を指導しています。

浅草日本古武道大会（四月）、靖国神社春季（四月）・秋季（十月）例大祭・みたま祭（七月）、京都下鴨神社奉納演武（五月）、京都白峯神宮奉納演武（五月）、明治神宮奉納古武道大会（十一月）、伊勢神宮（式年遷宮時）等である。

稽古場及び支部

本部　習成館道場

〒160—0016　東京都新宿区信濃町11—12　習成館
第十八代宗家　柴田章雄
☎・FAX（03）3341—8981
ホームページ　http://www.shuseikan.com

直心影流薙刀術

第十九代宗家
荻原 晴子

抱負

世界的流行の新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない非常時での大会開催は、多くの皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

技を創るのは、心であることを肝に銘じ「直心」より生まれ出る清浄心で一心に稽古し、微力ながら当流儀のすばらしさを少しでも多くの方に伝わることを願って演武致します。

由来

直心影流薙刀術の始祖は、松本備前守紀政元で今からおよそ五百年前、室町時代の末期、鹿島神伝神陰流という新剣法を創始したのに始まり、その流名は歴代業孫により伝えられてきたが、七代山田平左衛門藤原光徳はその名を直心影流と改めて流派を継承した。山田平左衛門藤原光徳をして直心影流の流祖としている。

代を重ねて園部秀雄（女）が明治二十八年、第十五代を継承。秀雄は多くの女学校で薙刀を教授。道場修徳館に薙刀教員養成所を創設してからは本格的に女子薙刀教師の養成に尽力し、女子武道としての薙刀術の興隆に貢献した。秀雄の伝えた直心影流薙刀術は、後継者の園部繁八、朝野夫妻が第十六代を継承、繁八は現在の直心影流薙刀術秀徳会を創立した。令和二年十月一日、第十八代宗家園部正美が健康上の事情により、荻原晴子に第十九代宗家継承を委ね現在に至る。

系譜

鹿島神伝松本備前守紀政元（元祖）―上泉伊勢守藤原秀綱（二代）―奥山孫次郎平公重（三代）―小笠原金左衛門源長治（四代）―神谷文左衛門尉直光（五代）―高橋弾正左衛門源重治（六代）―山田兵左衛門藤原光徳（七代・流祖）―長沼四郎左衛門藤原国卿（八代）―長沼正兵衛藤原綱卿（九代）―藤川弥司郎右衛門尉藤原近義（十代）―赤石郡司兵衛尉藤原孚祐（十一代）―団野源之進藤原義高（十二代）―男谷下総守精一郎信友（十三代）―佐竹鑑柳斉源義文（十四代）・同茂雄女（十五代）―園部秀雄女（十六代）―園部繁八（十七代）・同朝野（十八代）―戸谷明子（十九代）―園部正美―荻原晴子

流儀の特徴

当流儀の心法にある「柔よく剛を制する心なり」を表す小脇の構え、自然現象の中に流れる力の動きを取り入れた水車・風車と呼ばれる車返しの技、切先や石突きを使って突き込む技法などがあります。

演武者

打太刀　野﨑 房江
仕太刀　福嶋 相子

演武内容

胴切・巻落・稲妻・膝折・柄止め・抜き胴・（短刀）谷落とし

活動状況

一九六四年創立の秀徳会が、理事会を組織し活動している。各支部では、定例稽古会、研修会、地方審査会を行っている。

年間行事として

墓前祭（九月に先師の墓参）
温習会全国大会（本年は第六十五回）
全国審査会
巻物別研鑽会、錬成会、合宿
指導者育成稽古会

などの活動を通して流儀の保存と発展に努めている。

稽古場及び支部

国内では二十一支部、海外では三支部（ハワイ・フィンランド・ベルギー）がある。

秀徳会事務局
〒182―0025　東京都調布市多摩川 5―4―1―717
関　久代 方
ホームページ　http://www.jikishin-naginata.jp/

小野派一刀流剣術

第十八代宗家
矢吹 裕二

抱負

小野派一刀流の演武を通し、日本の貴重な精神文化の高揚、発展に寄与することができたら幸いであると考えています。

古武道によって培われた日本精神は、単に一日本という国の財産であるばかりではなく、世界にとっても大切なものであると信じています。今のような混迷の続く世界情勢の中で真に世界に、そして人類に貢献できるのは日本の武道精神であります。その精神を演武を通して具現する所存です。

由来

室町時代、伊藤一刀斎景久によって創始され、二代小野次郎右衛門忠明によって継承された。忠明は、徳川秀忠の指南役となってその武名高く、一刀流の理念と技法を確立し、真剣、刃引、木刀による組を編み大成した。爾来代々将軍家、津軽家、諸大名間に伝わり、日本剣法の代表的流儀となった。

一刀流には多くの支流、亜流があり、それらと区別するため正統を小野派一刀流と呼ぶ。この正統は忠一のとき、津軽信寿公に相伝された後、再び小野家に継承された。以後、津軽家、小野家に正統が伝承され、さらに小野忠喜より山鹿家に伝承され、大正に入り笹森順造に正統が伝えられた。

今日の一刀流は三代忠常、四代忠於により技が加えられ、指南法、稽古法、目録が定められ種々に伝承されてきたが、笹森順造が原点を掘り起こし、検証を加え、すべての技法、理論、伝統を再び統合し、再確立したものである。

系譜

伊藤一刀斎景久―小野次郎右衛門忠明―忠常―忠一―
津軽土佐守信寿―津軽信著―中略―信順―英麿―義孝―
　　小野忠久―中略―忠喜―山鹿高美―高智
笹森順造―笹森建美―矢吹裕二

流儀の特徴

「一刀即万刀」の哲理である「切落し」にその最大特徴がある。切落しとは、相手の太刀のおこりを見抜いて、しかもそれにこだわらず、居つかず、順に応じて、己からも進み抑えて一拍子に打ち勝つ技である。手法は車の輪が前に回るように丸く両腕を十分に働かせて切り下ろすとともに、両足を踏み込み進みゆくもので、一陽来復、循環無端の心得である。

演武者

宗　家　矢吹 裕二　免許皆伝
免許　鈴木 宏哉　免許
　　石崎 徹
　　門松 猛

演武内容

大太刀

大太刀とは一刀流の基本であり、手順に示した始めの構と技の運び、勝つところ、残心の構を正確に行うことにより、打方の意図、仕方の念慮、相互の攻防、虚実の去来、太刀技の起終、勝敗の機の幻滅、それから一歩前進して超勝の心徳に至る境地を技にあてはめて教えるのである。

高上極意五点

高上極意五点は一刀流極意の最高位の組太刀位取りが最も高く、奥が甚だ深く、巾が極めて広く、中味が誠に充実した尊い技である。

活動状況

第一、第二、第三、第四日曜日、土曜日午後、禮楽堂で稽古。その他門人たちが最寄りの場で稽古に励んでいる。一刀流のほか、直元流大長刀術、神夢想林崎流の道統を各宗家が継承し稽古、研究を重ねている。また、武道を通し東洋精神と西洋精神の融合について研究し、欧米での指導演武を続けている。

稽古場及び支部

禮楽堂
〒155―0032 東京都世田谷区代沢1―13―2
☎（03）3412―6986
大阪、イタリア、ドイツ、アメリカ・ベルギーなど国内外各地で定期的に稽古をしている。

神道夢想流杖術

代表 冨永彰三

抱負

神道夢想流の伝書に「傷付けず、人を懲らして戒むる、教えは杖の外にやはある」とある杖道。その形は円、形状は直すぐ。表裏なく上下無し。先も後もない。時に先となり時に後となる。見るからに平凡な杖である。が、しかしその技は先を取り裏を利し虚々実々の妙技を発揮します。

約四百五十年絶えることなく伝えられてきた技を鹿島神宮の大前にて演武することは身の引き締まる思いであります。精一杯演武させていただきます。

由来

流祖夢想権之助勝吉は、天真正伝神道流六代、桜井大隅守吉勝の門に入り、香取神道流の奥義を極め、その免許を受け、さらに鹿島直心影流の極意を授かった。

その後、流祖は、諸国を遍歴、艱難辛苦の武者修行に入り、筑前国に至る。

筑前太宰府天満宮の神域に連なる霊峰宝満山竈門神社に祈願参籠し、至誠神通満願の夜、童子現れ、丸木をもって水月を知れ、との御神託を得て三尺二寸の刀に一尺の柄に一分を長くし、四尺二寸一分、直径を八分として樫の丸木を作り、槍、薙刀、太刀の特徴を入れ、御神託と剣によって得た真理と実戦を体し、ここに杖術を編み出した。

以後、流祖はこれを黒田藩士に伝え、藩外不出の武術として栄え、歴代師範家に継承され、現在に至っている。

系譜

夢想権之助勝吉（流祖）―小首孫左衛門吉重（二代）―松崎金右衛門重勝（三代）―吉村半次郎（二十三代）―白石範次郎重明（二十四代）―清水隆次克泰（二十五代）―乙藤市蔵（二十六代）

流儀の特徴

杖術は突き、払い、打ちの攻撃を技とするが、左右両技を等しく使うのが大きな特徴である。これらの左右両技を連続的に使い、自分の手足の如く操作し、相手の動きに応じて体を捌き、武器を打ち落とすことができる。

演武者

打　大竹（おおたけ）　俊行（としゆき）　免許
仕　神之薗文男（かみのそのふみお）　免許
打　安田（やすだ）　嘉一（よしかず）　免許
仕　時任（ときとう）　晴美（はるみ）　免許

演武内容

中段・影・五月雨・奥の中から演武します。

稽古場及び支部

福岡本部　代表　冨永彰三
〒819―0373　福岡市西区周船寺3―5―13

東日本支部　代表　小野　景久
〒399―0601　長野県上伊那郡辰野町小野985
☎（0266）46―2001

大阪支部　代表　近藤　健一
〒664―0028　兵庫県伊丹市西野1―240―1シャルマンコート伊丹1―308
☎（072）779―0237

神奈川県支部　代表　大竹　俊行
〒195―0055　東京都町田市三輪緑山1―22―1―112
☎（044）988―7021

その他各都道府県にも支部がある。

立身流兵法

第二十二代宗家
加藤 紘

抱負

立身流は刀術（剣術と居合）、俳、鎗を中心として長刀、棒、半棒、四寸鉄刀その他を含む総合武道です。

今回は流儀の基軸である刀術から、その基本の形を演武します。

由来

流祖、立身三京は足利時代、伊予国の武将で、幼少より武術に精進し、幾多の勝負に勝ち抜いたが、技法を超えた高度の心法を極めんとして、妻山大明神に祈願して大悟し、勝機を未撃に知る無我の心境に達して必勝の原理を体得し、立身流を創始した。江戸時代は下総佐倉の堀田藩で、武士教育の中枢として重視され、権威ある宗家統率のもとに、非凡な剣士に厳しく伝承され、伝書十五巻や古文書と共に、正確に現在まで伝えられた。幕末ごろには半澤成恒・逸見宗助・兼松直簾らの名人が出た。

警視流の形には、立身流から剣術に巻落、居合に四方、柔術には柄搦及び捕縄の各一本が採用された。豊前中津の奥平藩に立身流の分派立身新流があって、福澤諭吉はこれを学び、晩年まで自負したのは有名である。

系譜

立身三京―立身石見守―立身数馬佐―三上半之丞―松井琴古―桑島太左衛門―大石千助―山口七郎左衛門―竹河九兵衛―糟谷団九郎―逸見柳芳―逸見宗八―半澤喜兵衛―逸見新九郎―半澤権右衛門―逸見宗八―逸見忠蔵―半澤成恒―加藤久―加藤貞雄―加藤高―加藤紘

流儀の特徴

居合、剣術を主軸とし、俳、鎗、棒、半棒、長刀、捕縄、手裏剣、さらに弓、物見などの心得、首見参などの作法や集団戦闘法などを含めた総合武術である。向、圓の二本が基本にして極意の形であり、これが千変万化する。

演武者

宗家　加藤 紘　免許皆伝　山田 市郎
奥伝　圖司 行克　奥伝　山崎 恒弥

演武内容

一　立身流剣術表之形　山田・圖司

太刀対太刀の基本の形です。居合対居合もあるのですが今回は省きます。

二　立身流剣術陰之形　圖司・山崎

小太刀で太刀を制します。右入身、左入身そして右転左転です。

三　立身流居合表之形　加藤

立合（立って抜く形）と居組（坐って抜く形）を組み合わせて演武します。

活動状況

新春初頭に、古式に則った抜初之儀と一般向けの演武大会を併せて開催し、公開をしている。秋には宗家の直接指導を受ける機会として定例の合宿を開催。三カ月に一度の特別講習会と、段位審査会を交互に実施している。その他にも試斬、数抜を折々に行う。

本部として指導者を対象とする稽古を毎週火曜日に行っている。各支部においても、それぞれ毎週数回定例稽古を行い、立身流の充実に努めている。

国内での一般の方々への演武公開の機会は年間約五十回である。

稽古場及び支部

本部連絡先　加藤法律事務所
千葉県千葉市中央区中央4―8―8　日進ビル6階
☎（043）221―0448
FAX（043）221―0449
Eメール　h.kato-lawoffice@opal.plala.or.jp
ホームページ　http://www.tatsumi-ryu.org/

支部

千葉県佐倉支部　八街支部　市原支部　東京都矢口支部
福島支部　オーストラリア支部　フランス支部
スペイン支部

文化財指定

昭和四十一年九月二十六日　佐倉市無形文化財に指定
保持者　加藤貞雄　加藤　高
昭和五十三年二月二十八日　千葉県無形文化財に指定替
保持者　加藤貞雄　加藤　高
昭和六十年十一月二十九日　現保持者加藤紘を追加認定

戸田派武甲流薙刀術

第二十一代宗家
建入久代

抱負

コロナ感染が見通せない中、第十二回大会開催にご尽力下さいました関係者の皆さまに心よりお礼を申し上げます。

流祖より四百八十年。今よりずっと困難な時代であっても、脈々と自流を残してくれた先人たちに感謝の意を込めながら、伝えられてきた技法等を鹿島神宮の御前にて奉納演武させていただきます。当大会に参加させていただき、「良き人の和」を作りながら進むことも、大切な継承の道と考えております。

由来

流祖は戸田清眼（富田勢源ともいう）、越前福井の戦国大名朝倉義景家臣で約四百五十年前の人である。富田家は名人達人の遣い手を輩出したため、中条流の本流を継いで富田流と称されるようになった。

流儀は越前から北武蔵に移り、小田原後北条三代目氏康の三男で埼玉県寄居の鉢形城主北条氏邦と夫人大福御前に伝えられた。氏邦は北条氏勢力の北辺を守っており、豊臣秀吉の小田原攻めに伴って鉢形城も落城した。

道統は氏邦家臣強矢維行が四代を継ぎ、剣術に対する裏技として強矢家代々で守り伝えられ、十三代強矢良輔武行（甲源一刀流紀州家指南役）により歴史の表舞台に登場した。武行は晩年秩父武甲山麓に過ごして武甲斎と名乗った際に、薙刀術を武甲流と名付け、さと夫人とともに薙刀術としての武甲流を大きく発展させた。明治以降、さとの門人十五代小松崎こと子より十九代新田寿々代まで女性が代を継承し、二十代中村陽一を経て、二十一代建入久代に伝えられている。

系譜

戸田清源（富田勢源）（流祖）―北条氏邦（二代）―大福御前（三代）―強矢維行（四代）―強矢弾正頼行（五代）―強矢継利（六代）―強矢維明（七代）―強矢庸勝（八代）―強矢頼忠（九代）―強矢忠賀（十代）―強矢維政（十一代）―強矢維賀（十二代）―強矢武行（十三代）―強矢佐登夫（十四代）（さと）―小松崎古登夫（十五代）（こと子）―矢沢勇夫（十六代）（いさ）―村上秀雄（十七代）（秀子）―小林清雄（十八代）（せい子）―新田寿々雄（十九代）（寿々代）―中村陽一（二十代）―建入久代（二十一代）

流儀の特徴

・戦国時代の甲冑武術である。甲冑着用の武器操作が技の根底をなし、防備の薄い部分を狙って薙ぎ上げ突き入れる。
・薙刀の有効な間合いを保つために、手の通いと足捌きに厳しく、素早い体捌きにより刃と石突を駆使する。
・他流にはない鍵付薙刀があり、太刀合・槍合を行なう。

演武者

宗家　建入　久代
永埜　浩司
本多日向子
福永　護

演武内容

合薙刀　鍵付薙刀太刀合

活動状況

○ 日本古武道協会に属し、各地の奉納演武と古武道大会に参加している。
○ 毎年五月当流主催により、東日本古武道交流演武大会を開催している
○ 小田原市・小田原箱根観光協会依頼により、郷土の伝承武術の披露と普及発展に努めている。

稽古場及び支部

○**小田原スポーツ会館武道場**
土・日曜日
○**小田原城二の丸広場芝地**　随時
○**埼玉支部**

大東流合気柔術

本部長
近藤 昌之

抱負

新型コロナウィルスの早期平穏を願い、武御雷の大神御前で一所懸命演武をさせていただきます。

由来

大東流合気柔術は、清和天皇末孫新羅三郎源義光を始祖に仰ぎ、甲斐武田家から会津の地に移り伝承する。大東流を継承した保科正之は殿中護身武芸である御式内を完成し、以来歴代会津藩主が継承し明治に至る。

幕軍の力手組長武田惣吉の次男武田惣角は、家伝の大東流柔術に加え、会津藩家老西郷頼母より御式内の秘奥を伝授された、これをもって全国を巡教。門下には、合気道を世に広めた植芝盛平をはじめ、陸海軍将校、判検事、警察官、各地の武道家、名士らが多数ある。

惣角他界後は長子時宗が本部長兼総務長に就任し、基本技法の名称化を行い大東流の普及に努めた。また、時宗より唯一免許皆伝を受けた近藤勝之が道統を継承し、国内外に多くの門下生・支部を作った。現在、近藤昌之が本部長を継承し、流派の保存、普及並びに国内外門下生の指導・育成を行っている。

系譜

●大東流柔術
新羅三郎義光―武田義清他―武田国継他―武田惣右衛門―武田惣吉―武田惣角―武田時宗―近藤勝之―近藤昌之

●大東流御式内（御敷居内）
保科政之―松平正容他―容保―西郷頼母―武田惣角―武田時宗―近藤勝之―近藤昌之

●大東流合気柔術
武田惣角―武田時宗―近藤勝之―近藤昌之

流儀の特徴

基本技は一一八か条裏表。居捕、立合、半座半立、後捕に大別される。相手を無力化する「合気」技法並びに一万数千といわれる技法の多様性が特徴である。

伝書

武田惣角・時宗より伝承されている秘傳目録・秘傳奥儀・秘奥儀・合気之術・合気二刀流秘傳・皆傳之事の六巻。

他に竹下勇海軍大将の合気武術覚帳一〇九八七手、植芝盛平先生の大東流合気柔術連続写真・久琢磨先生の大東流極意総伝全巻を伝える。

演武者

免許皆伝　近藤昌之
秘伝奥義　臼山秀透
　　滝口太士
　　味岡巧磨

演武内容

基本技・合気技・剣と柔術・多人数捕

活動状況

国内外道場において稽古を行う。詳細は本部ＨＰ。

台東区リバーサイドスポーツセンター、靖国神社、明治神宮、鹿島神宮、日本武道館並びに本部、国内外支部での演武大会。国内海外の支部への直傳会を開催し当流の継承に努めている。

大東流・大東流合気柔術・大東流合気武道の三名称で商標登録を取得している（第九・一六・四一類）。

稽古場及び支部

大東流合気柔術本部
東京都墨田区横網１―12―31
電話（０９０）３３１８―８７９３
https://www.daitohryu.com/
稽古日　火・金・日曜　午後六時三〇分～九時

支部・スタディーグループ

国内
葛飾・両国・世田谷・浜町・愛国学園・網走・帯広・旭川・札幌・金沢・長野・山梨・鹿児島

海外
アメリカ九拠点・オランダ五拠点・イタリア三拠点・ロシア三拠点・スイス二拠点・マルタ・スロバキア・イギリス・ドイツ・オーストリア・セルビア・ブルガリア・カナダ・オーストラリア・ＵＡＥ他

無比無敵流杖術

宗家十五代
根本憲一唯之

演武者

根本憲一唯之　村木　浩治
沢幡　伸男　小國　英智

演武内容

表ノ形

七本　九本　引杖　突杖

表の格　自在に変化する形である。

中位五箇條

七本の乱　九本の乱　引杖　突杖　背渡

・中位五ヶ条は格のくずしであり、太刀の連続攻撃に対して、杖を変化自在使い、太刀を殺して相手を倒す杖術である。
・電光石火な杖術

稽古場及び支部

明武館道場本部

〒311―1204 茨城県ひたちなか市磯遠原町31―2
☎（029）263―6917
毎週日曜日　午前十時～正午
毎週水曜日　午後七時～九時

支　部

茨城瓜連支部

文化財指定

昭和四十六年九月二十一日付　那珂湊市無形文化財に指定
平成六年十一月一日付　ひたちなか市無形文化財に指定

抱　負

第十二回　鹿島神宮奉納日本古武道交流演武大会開催を、心よりお慶び申し上げます。

大会開催にあたり、ご尽力頂いた鹿島神宮関係者各位に心より感謝致します。

古武道が、武の神武甕槌神を祀る由緒正しき場所に日本各地より集まり演武が出来る事は大変光栄に存じます。

また武道の精神が正しく引き継がれて行く事を願っております。

由　来

流祖佐々木哲斎徳久は槍の名手であり、関ヶ原の戦いにおいて、九尺の槍を使い激戦中、槍先が折れ、柄をもって奮戦。その後、日本六十余州の大小の神々と摩利支天尊に祈願し、その霊験により無始無終の悟りを得て、無比流兵杖術を開眼した。日本開山無住所として各地を遍歴し、後に六代目、片岡宗吉景重が水戸藩に仕えて以後、この地を中心に伝承した。明和、天明のころから水戸藩の武芸者のみならず、民衆の自衛武術として近郷近在において栄え、さらに秘儀が磨かれた。変化に富んだ武術として発達し、無比無敵流杖術として隆盛を極め、旧平磯村の大内藤次郎は、旧中根村の十代目安弥八郎忠信に師事し、十一代目を継承し、多くの門弟を育成した。その後、宗家十三代根本卯之吉忠勝から宗家十四代目を継承した根本平三郎唯久は流派の保存と伝承に尽力、昭和四十六年九月二十一日付、那珂湊市無形文化財指定を受け、後に昭和五十六年に明武館道場を創立。平成六年十一月一日付、ひたちなか市無形文化財指定を受け、現在は宗家十五代を根本憲一唯之が継承して、子弟育成に鋭意努力し、古武道の保存と振興に努めている。

系　譜

流祖 佐々木哲斎徳久―野村甚左ヱ門尉勝忠―武田藤七郎重明―本多治左衛門尉―山田宇左衛尉―片岡宗吉景重―軍司次左衛門信三―安弥八郎忠信―大内藤次郎忠信―勝村惣七忠信―根本卯之吉忠勝―根本平三郎唯久―根本憲一唯之

流儀の特徴

・構えは槍の操法が基本となり、身は半身、足は丁の字、打つと見せて引く、引くと見せて突く、突くと見せてさくる。
・変化に富んだ杖術

北辰一刀流剣術

代表　小澤　智

抱負

ＮＨＫ大河ドラマ「晴天を衝け」で描かれている徳川慶喜公を育んだ、水戸藩校弘道館が取り上げられ注目されました。弘道館では文武不岐の精神が徹底されて、武士の教育が実践されましたが、文武の武の一部を担ったのが北辰一刀流であります。

当流は、明治維新後も脈々と伝承され、水戸市無形文化財として今の世で修業されております。大変なコロナ禍の中ですが、この伝統の技を鹿島の大神様の前で演武出来ることは大きな喜びであります。

由来

北辰一刀流は、千葉周作を流祖とする。周作は晩年、天保六年（一八三五）、水戸烈公徳川斉昭に招かれ、月十六人扶持で水戸藩に出張教授をすることになったが、藩校弘道館が天保十年（一八四一）六月に開校すると、百石の禄高を給せられ、弘道館剣術師範役となり、藩の子弟に一刀流の指南と講義をした。

周作に学んだ子弟は数多くいたが、なかでも渡辺清左衛門、小澤三次郎敏行（寅吉の伯父）、小澤寅吉政方（初代東武館長）らは代表的剣客であり、弘道館剣術方の師範役をしていた。寅吉は明治維新の改革でその職を解かれたが、水戸学の「文武不岐」「学業一致」の精神を後世に残そうと明治七年一月自邸の角に「水戸東武館」を創設し、数多くの名剣士を世に送り出した。同時に北辰一刀流の系譜を絶やすことなくその精髄である一刀流格を子弟に授けた。水戸東武館にはその正統な系譜が残されていたこともあり、日本古武道協会は第四代水戸東武館館長、故小澤武を宗家に認定しており、現在の第七代館長、小澤智に受け継がれている。

「北辰一刀流格」は、木刀による「組太刀の形四十三本」「小太刀の形五本」「相小太刀の形六本」「刃引組十一本」などがある。

系譜

千葉周作成政（流祖）―小澤寅吉政方―小澤一郎弘武―小澤豊吉―森山繁雄―小澤武―小澤智

流儀の特徴

北辰一刀流の極意は、切落し突き、乗身にあり、とされている。特に、太刀組の「一ツ勝」は、敵の攻撃に対して、一太刀で防御すると同時に敵に打ち勝つ必殺の技で、この技で遣う切落し突きは、心気力が一致した瞬間の太刀遣いが求められ、当流の基本中の基本である。

演武者

中目録　兼子勝喜（かねこかつよし）　中目録　田中栄治（たなかえいじ）
中目録　上田忠夫（うえだただお）　大目録　髙山陽好（たかやまあきよし）

演武内容

北辰一刀流組太刀は、太刀組四十三本、小太刀組五本、相小太刀組六本、刃引き十一本がありますが、今回は太刀組十本と刃引き組九本を演武します。

《太刀組》　一つ勝・下段の霞・本勝等（十本）
《刃引き組》　巻き・摺り込み・張り等（九本）

活動状況

一、平成二十八年度オーストラリア連邦派遣武道団に参加。
全国古武道演武大会、鹿島神宮春・秋大会に参加。
二、県内剣道大会などでの演武。
茨城県剣道祭、各種剣道大会、道場開きの機会で公開演武。
三、東武館道場見学者への演武披露。
東武館が市指定有形文化財に指定され、かつ市の風致地区に建てられているところから見学者などの来訪が多く、その都度演武を披露。

稽古場及び支部

本部道場　一般財団法人水戸東武館
〒310―0061　水戸市北見町2―15
古武道研究会
毎週土曜日
午後五時三〇分より二時間

天神真楊流柔術（川越市）

第七代宗家
柴田孝一

抱負

常日頃、鍛錬した技を、武神を祀る鹿島神宮において奉納演武できることを光栄に思っております。

由来

流祖磯又右衛門柳関斉源正足は文化元年（一八〇四）、伊勢松坂に生まれた。十五歳で楊心流の名人、一ツ柳織部義路に入門。師の死去により真之神道流柔術の本間丈右衛門正遠に入門して奥儀を究めた。諸国を遍歴して名家先生に一度も敗れたことがなかった。ついに奥妙を極め、北野天満宮に参篭、祈願し、楊心流と真之神道流を合一統合し、天神真楊流を創始。江戸の神田お玉が池に道場を開き、諸国の藩士にて門に入るもの五千余人に及んだ。柔道の創始者嘉納治五郎は三代磯正智及び弟子の福田八之助に学んでいる。磯家が絶家したため宮本半蔵が五代宗家を継承する。また正幸弟又一郎（二男）、山崎家、三郎（三男）、青沼家の承諾を得、宗家を継承する。

系譜

磯又右衛門正足―磯又一郎正光―磯又右衛門正智
- 磯又右衛門正信―磯又右衛門正幸―佐藤正義
- 井上敬太郎
- 吉田　千春―宮本半蔵―相宮和三郎―柴田孝一
- 戸沢徳三郎
- 福田八之助―嘉納治五郎

流儀の特徴

相手の動きに従って無理がなく合理的（投、絞、極、当）に相手を制す。

免許の道歌「捕われては　水に浮く木の身をもてし　浪にまかせつ　風にまかせつ」

演武者

柴田（しばた）　孝一（こういち）　柴田（しばた）　俊充（としみつ）

演武内容

中段投捨
鐘木（しゅもく）　拳打ちを受け、足を払って投げる。
刈捨（かりすて）　拳打ちを受け、前後に崩して後方に投げる。
朽木倒（くちきたおし）　拳打ちを飛び込みながら後方に倒す。
腰車（こしぐるま）　横から抱えられたとき、肘当てをし後方に倒す。
横車（よこぐるま）　前後の帯を持たれたとき、襟と肩を持ち足を払って投げる。
片胸捕（かたむなとり）　片胸襟を持ちながら拳打ちを受け、足を払って投げる。
手髪捕（たぶさとり）　髪を捕まれたとき、肘当てをし足を払って投げる。
小具足（こぐそく）　小太刀で切付けられたとき、受け左右に引き分け後方に投げる。
腰刈捨（こしかりすて）　手を持たれ引かれたとき、手を腰に巻き付け後方に投げる。
獨鈷（どっこ）　後方に回り耳当てをし後方に投げる。
捨身（すてみ）　前襟と前帯を持ち後方に投げる。
下藤（さがりふじ）　前襟と紋所を持ち後方に投げる。
極意上段
蹴返（けかえし）　膝裏を蹴り倒し、後方から咽喉を絞め、足の爪先で横腹を蹴る。
大殺（おおごろし）　胸、腰、膝裏の三つ当てし倒し咽喉を絞め、足の爪先で横腹を蹴る。
天狗勝（てんぐしょう）　肘内側で咽喉を手先（手筈）で頚を圧し絞め、肘で水月を突く。

活動状況

江戸川橋体育館柔道場（文京区小日向1―7―4）
☎（03）3945―4008
土曜午後三時半～六時

川越武道館柔道場（川越市郭町2―30）
☎（049）242―7220
・木曜午後六時半～九時　・土曜午前十時～正午
・日曜午前九時半～正午

山形県米沢市武道館（米沢市金池3―1―62）
☎（0238）23―0664
火曜午後六時～九時

併伝　浅山一伝流体術　戸塚派楊心流柔術

京都、北野天満宮奉納演武を行っている

稽古場及び支部

連絡先
〒350―1137　埼玉県川越市砂新田1―6―48
☎（049）242―7098

支部　札幌・岐阜・大阪

鹿島新當流剣術

第六十五代宗家
吉川 常隆

抱負

昨年の大会はコロナウィルスの感染拡大防止のため残念ながら中止となってしまいましたが、本年は2年ぶりに開催されることになり地元の流派として大変嬉しく思っております。未だコロナ禍の中ではありますが、全国の各流派の皆さんと演武を通して交流できることが楽しみです。鹿島神宮の大神様に気持ちのこもった演武を奉納したいと思っております。

由来

「兵法は東国から」といわれているが、この東国とは鹿島・香取の地を指し、日本の武道発祥地として鹿島は古い歴史と道統を有している。今から約千六百年前、鹿島神宮大行事大鹿島命の後裔、国摩真人が鹿島神宮境内の高天原に神檀を築き、祈願熱祷を捧げて神託を受け、武甕槌神の神剣「韴霊剣」の法則である神妙剣の位を授かり、以後「鹿島の太刀」と称して大行事座主職卜部吉川家を中心に継承されていた。後、鹿島の太刀は上古流・中古流と発展的に呼称され、また鹿島七流といわれるほど隆盛をきわめた。

一四八九年、卜部覚賢の次男に生まれ、その後、塚原土佐守安幹の養子となった塚原卜傳高幹は、実父から鹿島中古流を、養父から香取神道流を学んだ。また、武者修業による修練を重ね、かつ鹿島神宮に一千日の参籠祈願をして「心新たに事に当たれ」との神示を受けるとともに鹿島の太刀の極意を悟り、流派名を「鹿島新當流」と改め、生家卜部吉川家に継承され、今日に及んでいる。

系譜

始祖 国摩真人―活仁（五代）―常快（十二代）―繁雅（二十三代）―晴常（三十二代）―秀慶（四十代）―呼常（四十九代）―覚賢（五十代）
流祖 高幹（塚原卜傳）―常応（五十九代）―浩一郎（六十四代）―常隆（六十五代）

流儀の特徴

甲冑武道を基礎として想定された実戦的古武道である。甲冑の弱点とされる小手・喉・頸動脈などを突き、切ることによって相手を制する。

演武者

面ノ太刀	打太刀	今井 淳也
	仕太刀	小松崎政史
七条ノ太刀	打太刀	横尾 廣美
	仕太刀	小松崎政史
霞ノ太刀	打太刀	橋本 大
	仕太刀	横尾 廣美
間ノ太刀・高上奥位十箇ノ太刀	打太刀	橋本 大
	仕太刀	今井 淳也

演武内容

面ノ太刀
基本の技。十二カ条の組太刀からなり、敵の働きにしたがって、地形に応じ、変化自在に合理的な手段をもって相手を制する。

七条ノ太刀
中極意の技。七カ条からなり、一太刀ごとに敵に連れて作用し、最後は勝ちをおさめる。

霞ノ太刀
中極意の技。七カ条からなり、一部薙刀、槍の相手と対峙して、勝つ技がある。

間ノ太刀
中極意の技。三カ条からなり、間の修練と悪気を払う技で構成されている。

高上奥位十箇ノ太刀
大極意の技。十カ条からなり、二人の敵と対峙した場合や、小太刀を用いて、太刀を使った敵と勝負する場合など甲冑武道の神髄を取り入れている。

活動状況

(一) 毎年一月七日道場開き式を執行し、新春を祝い、年間修練の無事と当流の発展を祈念。
(二) 一月八日より一カ月、寒稽古実施。定例稽古日、毎週金曜日午後八時～十時。
(三) 毎年六月第二日曜日、鹿島神宮奉納古武道演武会を開催。
令和三年六月十三日剣聖塚原卜伝生誕祭として開催。

稽古場及び支部

鹿島新當流道場（明治二十年建築）
〒314―0031 茨城県鹿嶋市宮中1―3―39
☎・FAX（0299）82―8421

文化財指定

昭和五十二年　鹿島町無形文化財指定
平成元年　茨城県無形文化財指定

公益財団法人
日本武道館

第四十五回
日本古武道演武大会

源流 ここに集う

日時 令和四年二月六日(日)

会場 日本武道館

日本武道館　日本古武道　検索

お問い合わせ
(公財)日本武道館 振興課
〒一〇二―八三二二 東京都千代田区北の丸公園二番三号 ☎〇三・三二一六・五一三四

武道古武協会

ようこそ　鹿嶋市へ
～the sightseeing of Kashima City～

茨城県の南東部に位置する鹿嶋市は、太平洋と北浦に挟まれ、緑が多く、自然に囲まれたまち。
一方で鹿島港を中心とする鹿島臨海工業地帯を有する日本有数の工業都市。

東京から鹿嶋へ

東京駅から高速バスで約2時間。

自動車ならば、東関東自動車道・潮来IC経由で1時間40分ほどと都心からのアクセスも良好。

古代と現代が出会うまち　かしま

鹿嶋には素晴らしい観光スポットがたくさんあります。
ここではその中でも代表的な２つを紹介します。
何度も足を運んで、ぜひ鹿嶋のファンになってください。

鹿島神宮
Kashima Jingu Shrine

●鹿島神宮は紀元前660年の創建と伝えられ、日本でも有数の由緒正しき神社です。古くは、伊勢神宮・香取神宮と並べられ、江戸時代以降には徳川家の崇敬を集め、東国三社のひとつとしてもにぎわいました。

●最近では、パワースポットとしても有名で、多くの観光客が訪れ、その力を取り込んでいます。

カシマサッカースタジアム
Prefectural Kashima Soccer Stadium

●カシマサッカースタジアムは、Jリーグ最多の優勝回数を誇る「鹿島アントラーズ」のホームスタジアムです。

2002年の日韓共催ワールドカップでは試合会場としても使用されており、日本でも有数のサッカー専用スタジアムです。

鹿嶋市 観光マップ＆塚原卜伝ゆかりの地マップ

●車＝東関東自動車道潮来I.C.から車で10分
●車＝東関東自動車道鉾田I.C.から車で30分
●バス＝東京駅八重洲南口から高速バスで120分
●鉄道＝JR鹿島線 鹿島神宮駅下車
●鉄道＝鹿島臨海鉄道大洗鹿島線 鹿島神宮駅下車

鹿島神宮

■楼門

寛永11年(1634)、徳川頼房公が奉納したこの門は「日本三大楼門」の一つ。緑の中にひときわ朱色が鮮やかです。なお「鹿島神宮」の扁額(へんがく)は東郷平八郎元帥の直筆によるものです。

■本殿

社殿は元和5年(1619)徳川秀忠公より奉納されたもので、桃山期の極彩色が華やか。本殿・幣殿・拝殿・石の間のいずれもが国の重要文化財の指定を受けています。社殿の背後にある杉の巨木は根廻り12m樹齢1,200年と推定されるご神木です。

■カシマサッカースタジアム

ワールドカップ会場として整備されたスタジアムは収容人員41,800人を持つ、本格的なサッカー専用スタジアム。2007年、Ｊリーグ初の10冠を達成した鹿島アントラーズのホームスタジアムです。

■根本寺と芭蕉の句碑

聖徳太子の開基と伝えられる寺で、仏頂和尚の禅の師と仰ぐ俳聖・松尾芭蕉も貞享4年(1687)にここへ月見に訪れています。その様子は『鹿島詣』にも記されており、境内には“月はやし梢は雨を持ちながら”などの句碑も建てられています。

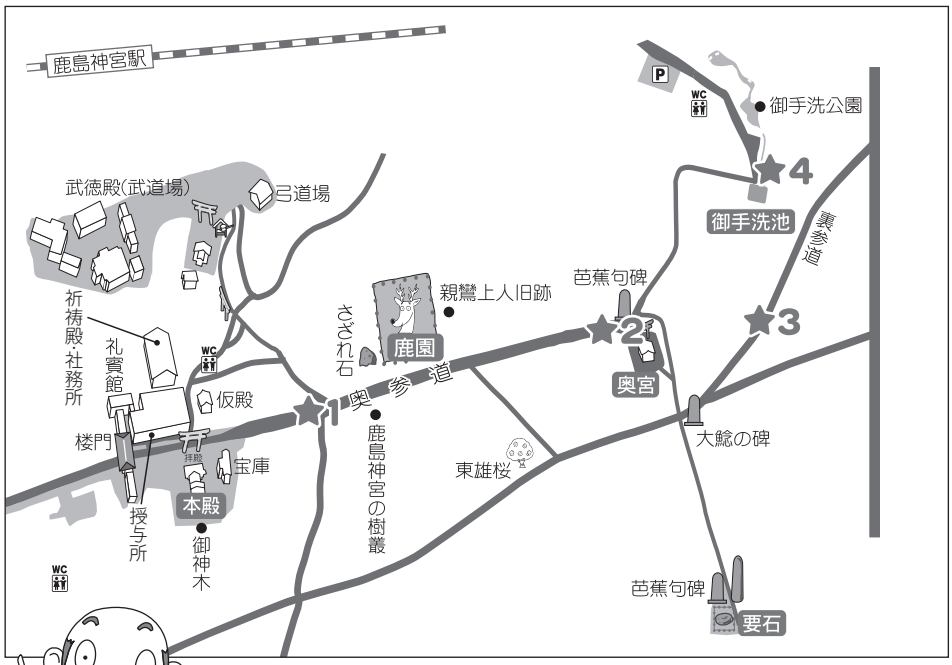
■塚原卜伝の像

郷土の偉人、塚原卜伝(1489～1571)は、鹿島新当流の開祖。その偉大な功績を記した碑と銅像が剣聖塚原卜伝誕生五百年を記念して建立されています。

■塚原卜伝の墓

塚原卜伝は、将軍足利義輝や伊勢国司・北畠具教(とものり)らの師となりました。その墓は須賀・梅香寺跡にあり、剣の道を志す人たちが今も多く訪れています。

NHKBS時代劇「塚原卜伝」ロケ地マップ



■奥宮

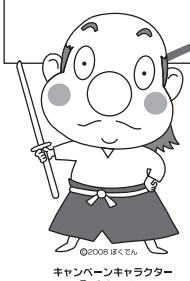
慶長10年(1605年)、徳川家康が関ヶ原の戦勝のお礼に本殿として奉納されました。二代将軍、徳川秀忠による社殿造営の際に現在の処に引き遷したもので、重要文化財に指定されています。

★2
ドラマでは本殿として撮影が行われました。卜伝の時代を感じることができるメインスポット。

■御手洗池

この池は、古くから神職のみそぎの場で、大人が入っても子供が入っても水面が胸の高さを越えないといわれ、〝鹿島の七不思議〟の一つとなっています。公園も整備され、市民の憩いの場になっています。

★4
撮影では、堺雅人さんも御手洗池に入り身を清めました。



キャンペーンキャラクター
「ぼくでん」

★1 奥参道
樹叢の中鹿園へと続く奥参道でも撮影が行われました。

★3 裏参道
この場所はドラマ中で卜伝の稽古場となっており、御神木とされた大木があります。

鹿嶋市商工観光課
〒314-8655
茨城県鹿嶋市平井 1187-1
TEL (0299) 82-2911
FAX (0299) 84-1213
http://city.kashima.ibaraki.jp

鹿嶋市商工会
〒314-0031
茨城県鹿嶋市宮中 2-1-34
TEL (0299) 82-1919
FAX (0299) 82-9401
http://www.sopia.or.jp/shokokai/

鹿嶋市観光協会
〒314-0032
茨城県鹿嶋市宮下 4-1-2
TEL (0299) 82-7730
FAX (0299) 83-8899
http://www.sopia.or.jp/kashima-kanko/

日本武道館発行の単行本

大東流合気柔術 琢磨会 その技法と合気之術

大東流合気柔術琢磨会総務長 **森 恕 著**

四六判・上製・232頁　定価2,200円

中興の祖・武田惣角から久琢磨に、そして森恕に受け継がれた神秘の武術。小手を駆使した関節技・急所技から、抜き合気・入れ合気・触れ合気・前肩詰め合気などの合気之術まで、今まで門外不出とされてきた数々の技法の神髄と極意を、琢磨会総務長が明らかにする。

平法 天真正伝香取神道流

天真正伝香取神道流師範　**大竹 利典 著**

四六判・上製・296頁　定価2,640円

近世剣術の源流として知られる天真正伝香取神道流の全伝を受け継ぐ著者が、その膨大な武と知を語る。香取神道流の歴史、剣術・居合術・薙刀術・手裏剣術などの武術、方術・築城術などの遁甲術や軍学兵法を、伝書を基に紹介。さらに、七十年近い修行人生を振り返り、武を志す全ての者に必要な香取神道流の「平法（へいほう）」の思想について語る。

日本の古武道

古流武術研究家　**横瀬 知行 著**

B5判・上製・箱入・462頁・定価5,500円

直接取材による 2000 枚の写真と未公開資料で古流の全貌を紹介！
日本の古武道には長い歴史と伝統があり、流祖に始まる一子相伝の脈々たる生命の大河を貫く知恵と経験が、一つの見事な体系となって現代に伝えられている。

小笠原流の伝書を読む

弓馬術礼法小笠原教場三十一世宗家 **小笠原清忠 著**

四六判・上製・322頁　定価2,640円

鎌倉時代から江戸時代にいたる武家礼法で、弓術、弓馬術と結びついた小笠原流。まずは小笠原家の歴史をその起源から概観し、続いて礼法の総論を述べる。さらに小笠原家に伝わる『修身論』や『体用論』などの伝書や教歌を繙いていく。伝書や教歌の原文を記して、その教えが現代にどう活かされているのか具体的事例を挙げながら解説。「礼に始まり礼に終わる」武道修業者必読の一書。

最新刊 マンガ・日本武道風土記（上・下巻）

漫画家・別府大学客員教授　**田代しんたろう** 著

上巻 B5 判・248 頁・定価 1,100 円 / 下巻 B5 判・248 頁・定価 1,100 円

全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の史料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。遠くへ足を運べない今、マンガの世界で日本各地を巡ってみては。

上巻目次

第１章　柔道のまち・久慈と三船十段
第２章　尚古集成館と薩摩文化
第３章　日本一の弓のまち・都城
第４章　相撲ロマンの地　出雲・隠岐
第５章　沖縄の伝統文化・空手道
第６章　合気道開祖の生地・南紀田辺市
第７章　少林寺拳法発祥の地・多度津
第８章　なぎなたのまち伊丹市
第９章　湖西に響く銃剣道の気合い
あとがき

下巻目次

第 10 章　柔道の鬼を生んだ町・川尻
第 11 章　武術の源流　鹿島・香取
第 12 章　日置流弓術の地　近江・竜王町
第 13 章　緑の木曽谷にハッケヨイ！
第 14 章　沖縄伝統空手の今と未来
第 15 章　合気道黎明の地　北海道・白滝
第 16 章　讃岐の地に少林寺拳法総本部
第 17 章　なよ竹の心伝える会津
第 18 章　銃剣道の甲子園・岩沼市
あとがき

月刊武道・単行本のご注文・お問合せは
日本武道館出版広報課までどうぞ　TEL03(3216)5147 FAX03(3216)5158

心 技 体 MONTHLY MAGAZINE THE "BUDO"
人を育てる総合誌

月刊 武道

武道界のオピニオンリーダー誌

教育・健康・教養を三本柱に、役に立つ「武道人間学」の情報を満載!

毎月28日発行　定価556円
年間購読6,666円(税・送料込)

● 9月号特集ニュース

武道の大会を豊富な写真で紹介。本日の大会記事は、11月号(10月28日発行)に掲載予定です!　(画像は2019の掲載記事)

好評連載中

- **武士の精華　武具光燿**
  九州国立博物館　望月規史
- **世界武術紀行**-その歴史と文化を訪ねて-
  早稲田大学名誉教授　寒川恒夫
- **日本人の心根を考える**
  鎌倉女子大学教授・東京大学名誉教授　竹内整一
- **幕末維新英傑伝**
  東京大学東京名誉教授・皇學館大学教授　菅野覚明
- **マンガ・武道のすすめ**
  漫画家・別府大学客員教授　田代しんたろう

好評既刊

絵と文　**中村麻美**(なかむら まみ)
F4判・カラー・上製・96頁・定価2,970円

伝えたい日本のこころ

中江藤樹 ― 母への薬

良寛さまと筍

小林虎三郎　米百俵

人生をより豊かに生きる道しるべとなる絵本。

古き良き日本人の美徳・品格が伝わる一冊。「小林虎三郎　米百俵」「中江藤樹―母への薬」「良寛さまと筍」など、かつて語り継がれていた日本人の心を描く物語を、月刊「武道」表紙絵でおなじみの中村麻美の絵で鮮やかに彩る。解説文含む全四十五話収録。

編集発行 公益財団法人 日本武道館　〒102−8321 東京都千代田区北の丸公園2番3号
https://www.nipponbudokan.or.jp/

第12回 鹿島神宮奉納 日本古武道交流演武大会プログラム

令和3年10月10日

編集・発行　公益財団法人日本武道館
〒102-8321　東京都千代田区北の丸公園2番3号
電話　03(3216)5100
ホームページ　https://www.nipponbudokan.or.jp

いかなる形式においても著作権者に無断で複製し、利用することを固く禁じます。
©2021 Nippon Budokan Foundation

印刷・製本　株式会社 三友社

公益財団法人
日本武道館